洲本市所在

下加茂遺跡Ⅱ

洲本川河川激甚災害対策特別緊急事業（巽川工区）に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

平成21年3月

兵庫県教育委員会

洲本市所在

下加茂遺跡Ⅱ

洲本川河川激甚災害対策特別緊急事業（巽川工区）に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

平成21年3月

兵庫県教育委員会

遺跡遠景（東から）

遺跡遠景（西から）

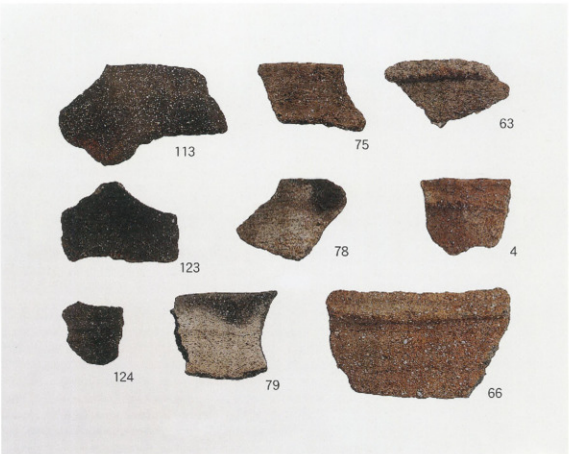
遺跡遠景（南から）

遺跡遠景（北から）

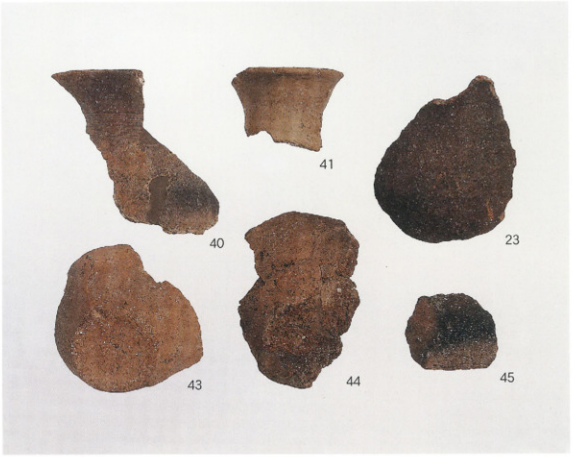
遺跡全景と調査区の位置（南から）

調査区全景（南から）

6区ＳＸ－１土器出土状況（南から）



縄文土器



弥生中期初頭の土器

紀伊型甕の土器

例　　言

1．本書は洲本市下加茂2丁目に所在する下加茂遺跡の発掘調査報告である。
2．発掘調査は兵庫県淡路県民局洲本土木事務所が行う洲本川河川激甚災害対策特別事業（巽川工区）に伴って実施したものである。
3．発掘調査にあたっては、兵庫県教育委員会と兵庫県淡路県民局が委託契約を締結し、兵庫県立考古博物館が実施したものであり、本発掘調査・整理調査に係る経費は兵庫県淡路県民局が負担した。
4．発掘作業は発掘調査工事として発注し、請負契約で実施した。
4．遺物写真の撮影は外部委託で実施した。
5．本書の執筆・編集は、嘱託職員前川悦子の協力を得て、古瀬雅仁が行った。
6．本発掘調査で作成した写真・図面等の記録類と出土した遺物類は全て兵庫県立考古博物館で保管している。
7．本発掘調査に際しては、関係各機関をはじめ、以下の方々に御教示、御協力を頂いた。御芳名を記して深謝の意を表する。

浦上雅史（洲本市教育委員会）　定松佳重（南あわじ市教育委員会）
土井孝之（和歌山埋蔵文化財センター）

凡　　例

1．土器・土製品は区別なく通し番号としている。この他、鉄製品については番号の頭にFを付けて通し番号とし、銅製品には番号の頭にCを、石製品にはSを付している。
2．土器の内、断面黒塗りは須恵器、斜掛けは瓦器・瓦質土器を示している。白抜きは弥生土器・土師器・陶器・磁器を示す。
3．本書に記述した標高は東京湾平均海面（T.P.）からの高さ、国土座標値については世界測地系で表している。
4．また本書で使用している方位は座標北を示している。

本 文 目 次

第１章　はじめに
　第１節　調査に至る経緯と調査の経過
　　１．調査に至る経緯……1
　　２．調査の経過……2

　第２節　遺跡の環境
　　１．地理的環境……5
　　２．歴史的環境……7

第２章　調査の結果
　第１節　遺構……11
　第２節　遺物……30

第３章　自然科学的分析
　第１節　樹種同定……45
　第２節　年代測定……47

第４章　まとめ……50

巻頭カラー写真目次

巻頭カラー図版１　上）遺跡遠景（東から）
　　下）遺跡遠景（西から）
巻頭カラー図版２　上）遺跡遠景（南から）
　　下）遺跡遠景（北から）
巻頭カラー図版３　上）遺跡全景と調査区の位置（南から）
　　下）調査区全景（南から）
巻頭カラー図版４　上）６区ＳＸ－１土器出土状況（南から）
　　下）縄文土器
巻頭カラー図版５　上）弥生中期初頭の土器
　　下）紀伊型甕の土器

挿図目次

第１図　遺跡の位置
第２図　調査区配置図
第３図　洲本平野の地形
第４図　調査区周辺の地形
第５図　遺跡の位置と周辺の遺跡
第６図　調査区全体図
第７図　０区全体図
第８図　０区遺構断面図
第９図　０区ＳＤ－１断面図
第10図　０区ＳＲ－１・ＳＲ－２断面図
第11図　６区全体図
第12図　６区中世の遺構全体図
第13図　６区柱穴断面図
第14図　６区ＳＫ－１
第15図　６区ＳＫ－３
第16図　６区ＳＤ－２断面図
第17図　６区弥生時代中期の遺構
第18図　６区ＳＸ－１
第19図　６区ＳＸ－２
第20図　６区弥生時代前期～中期初頭の遺構
第21図　６区ＳＤ－３
第22図　６区ＳＤ－４～７
第23図　０区遺構内出土土器
第24図　０区ＳＤ－１縄文土器
第25図　０区ＳＤ－１出土土器
第26図　０区ＳＲ－１出土土器
第27図　０区ＳＲ－２出土土器
第28図　０区包含層出土土器１
第29図　０区包含層出土土器２
第30図　１・２区包含層出土土器
第31図　６区遺構出土土器
第32図　６区包含層出土土器１
第33図　６区包含層出土土器２
第34図　石器
第35図　銅銭
第36図　鉄製品

写真目次

図版１　調査区全景（航空写真）
図版２　上）０区全景（南から）
　　下）０区ＳＤ－１・ＳＲ－１・ＳＲ－２（南から）
図版３　上）０・１区全景（南から）
　　中）０・１区境部土層断面（南東から）
　　下）１・２区全景（南から）
図版４　上）３区全景（東から）
　　中）３区南壁土層断面（北西から）
　　下）４区全景（南から）
図版５　上）６区全景（西から）
　　下）６区中世遺構群（南西から）
図版６　上）６区ＳＸ－１（北から）
　　下）６区ＳＸ－１（西から）
図版７　上）６区ＳＸ－２　土器出土状況（南から）
　　下）６区弥生時代中期以前の遺構（西から）
図版８　上）６区ＳＤ－３（南から）
　　下）６区ＳＤ－３断面（北から）
図版９　上）６区ＳＤ－３木材出土状況（北から）
　　中）６区ＳＤ－６・７断面（北西から）
　　下）６区ＳＤ－６・７（北から）
図版10　０区　出土土器１
図版11　０区　出土土器２
図版12　０区　出土土器３
図版13　０区　出土土器４
図版14　１・２区　出土土器
図版15　６区　出土土器１
図版16　６区　出土土器２
図版17　６区　出土土器３
図版18　磁器・陶器・石製品・銅製品・鉄製品

第１章　はじめに

第１節 調査に至る経緯と経過

１．調査に至る経緯

平成16年10月19日から20日にかけて襲来した台風23号は兵庫県下に記録的な豪雨もたらし、県下各地は甚大な被害にみまわれた。淡路においても、崖崩れが多発し、中小河川や溜池が相次いで決壊するなど、大きな被害が発生、洲本市内では洲本川やその支流が決壊・氾濫し、甚大な浸水被害を受けた。

このため、兵庫県では緊急かつ抜本的な河川改修を計画し、平成16年12月に河川激甚災害対策特別緊急事業が、平成17年３月に改良復旧事業が採択され、平成17年度から両事業に着手した。

第１図　遺跡の位置

淡路全域を管轄する兵庫県淡路県民局洲本土木事務所でも被害を受けた各河川の復旧・改修事業を計画し、洲本川水系では本流以外にも、支流である千種川・稲戸野川・巽川については本流との合流点付近を中心に改修することを計画した。この内、巽川は先山の東麓から平野部に流入し、大きく蛇行して洲本川に注ぎ込む。この蛇行する約200ｍの部分が水量のスムーズな流下の妨げとなり、台風23号の豪雨でもこの部分で堤防が決壊し、人家や田畑に甚大な被害をもたらした。そこで河川改修計画ではこの蛇行部分をショートカットして新たな河川を整備するとともに、堤防を嵩上げ、川底を掘削することによって巽川の流下能力を高め、洪水被害の防止を図ることを計画した。

この計画が地元住民や地権者の協力が得られた段階で、県教育委員会に埋蔵文化財についての照会があり、県教委では周知の遺跡である「下加茂遺跡」に近接していることから、分布調査を実施し、遺物が採集されたことから、埋蔵文化財が存在する可能性があることを回答、平成18年度に確認調査を実施した。その結果、明確な遺構は検出されなかったが、遺物が出土し、方形周溝墓が検出された平成15年度の調査区に隣接し、地形的にも変化がないことから、本発掘調査が必要と判断した。

そこで本発掘調査の実施について、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課文化財室審査指導係の指導の下、洲本土木と協議し、事業は激甚災害対策特別緊急事業であり急を要すること、堤防下は、盛土によって遺跡が傷められることはないと判断されることから、調査範囲から除外するという審査指導係の判断を受け、調査範囲は掘削範囲に限定することとなった。これにより、調査範囲が決定し、この範囲内の用地等について地元調整がほぼ整えば直ちに本発掘調査を実施することで合意した。

平成19年になり、一部用地問題について未調整であったものの、事業を９月に着工する予定であることや、用地の調整は調査期間中に解決する見通しであるとのことから、平成19年７月、本発掘調査に着手した。なお、本発掘調査は河川工事と同時に行われる市道加茂中央線の橋梁部についても実施した。

２．調査の経過

１．発掘作業（第２図）

ほぼ協議が整った平成19年５月18日、洲本土木事務所を所管する兵庫県淡路県民局と委託業務契約を締結し、平成19年６月18日発掘調査工事を請負工事として制限付一般入札、同日に航空測量を業務委託として入札を行い、それぞれの業務を施工する業者を選定した。発掘調査工事は６月22日に落札業者と契約を締結し、６月25日付けで着工した。

また、６月22日には着工に向け、請負業者との現地立会を洲本土木を交えて行った。その際に洲本土木側から、０区については用地が未調整であること、調査予定地内の農業用水路は現状のままにすること、市道は通行止めにできないこと、また市道内には水道管等の埋設物があること、６区の作業は農作物の収穫が終えてからにすること等、作業開始に向けて細かな条件が口頭で示された。

これを受け、０区については調査終了時に未調整であれば今回の調査契約から除外する、市道下については調査から除外するが今後の対応は３区・４区の調査結果から判断する、調査区内の農業用水路については崩壊させないよう、掘削にあたっては十分な間隔を保って作業する、６区については調査の最後に行うことで合意した。

このことで、調査区は０～６区の７地区に分割される形となり、５区については実質的に掘削が不可能となったため調査区から除外することとした。また、調査の進行上では、掘削残土処分のため、３区で残土をダンプトラックに積み込むことになることから、調査は１区から２区、４区、６区と進め、６区の終了時に０区の用地調整をみて、３区の調査時期を決めることとした。

この現地立会の結果を受け、６月25日に調査に着工し、７月２日までの８日間は現地事務所の整備など、発掘作業体制の準備に費やした。７月３日からは調査区の設定、調査前の測量等、掘削作業開始のための準備作業を行い、７月９日から本格的に掘削作業を開始した。

１・２・４区の調査では水田土壌と洪水砂が交互に堆積し、その下は河道が入り乱れた沖積層となったため、掘削は７月19日に調査は終了した。７月20日からは６区の調査に移り、耕土・床土を機械力で除去し、床土直下の上層遺構面で、弥生時代中期と中世の遺構を検出した。８月７日、１・２・４区と合わせて、これらの遺構の空中写真測量を行った。

８月８日からは６区の遺構の断ち割り作業と下層面の調査に移ったが、下層面の遺構は上層面で検出が可能であることが判明したため、下層面への掘り下げを中断して溝等の遺構を検出した。そしてこれらの記録を作成した後、再度下層への掘り下げを行い、下層面での遺構検出を行ったが、明確な遺構は検出されなかった。この作業に並行して、弧状に検出されたＳＸ－１の性格を把握するため、南側を用地境界まで拡張する作業を行い、ＳＸ－１が円形周溝墓と断定できることを確認し、８月30日に２度目の空中写真測量を行った。また空測の準備と平行して撤収準備に入り、埋め戻しで使用しないベルトコンベアーや写真撮影用足場等は撤収した。

しかし、翌８月31日、洲本土木から０区の用地について調整が終了し、調査の実施が可能になったことの連絡が入った。このため、急遽撤収準備を中止して、洲本土木と現地立会を行った。そこで、掘削

残土は関連工事で使用することから、耕土と床土以下の残土に分け、0区北側に仮置きしてほしい旨の要望を受けた。調査機材の大部分を撤収したため、当方としても都合がよい申し出であると判断し、請負業者にこれらの点を指示し、9月3日から掘削準備、9月4日からは掘削作業を開始した。掘削は耕土を機械力で除去した後、再度機械力を投入して床土を除去した。遺構は床土直下で検出され、9月18日にこれらの遺構の空中写真測量を行った。空中写真測量後、6区と同様に段丘を構成する基盤層まで掘り下げを行ったが、遺物の出土はあったものの、遺構は検出されず調査を終了した。

また、3区については9月3日に調査し、市道沿いで危険性があるため、9月6日に受検し、ただちに埋め戻しを行った。

9月18日には、0・3区以外の地区について受検し、受検後、4・6区について直ちに埋め戻し作業を開始し、9月21日に終了した。0区については書類が整った10月9日に受検、その後、現場事務所の撤去等を行い、10月22日に完成検査を実施し、発掘作業は終了した。

発掘調査の体制

調査員　吉識雅仁　山上雅弘　小川弘太

現場事務員　川向尚美

2．整理作業

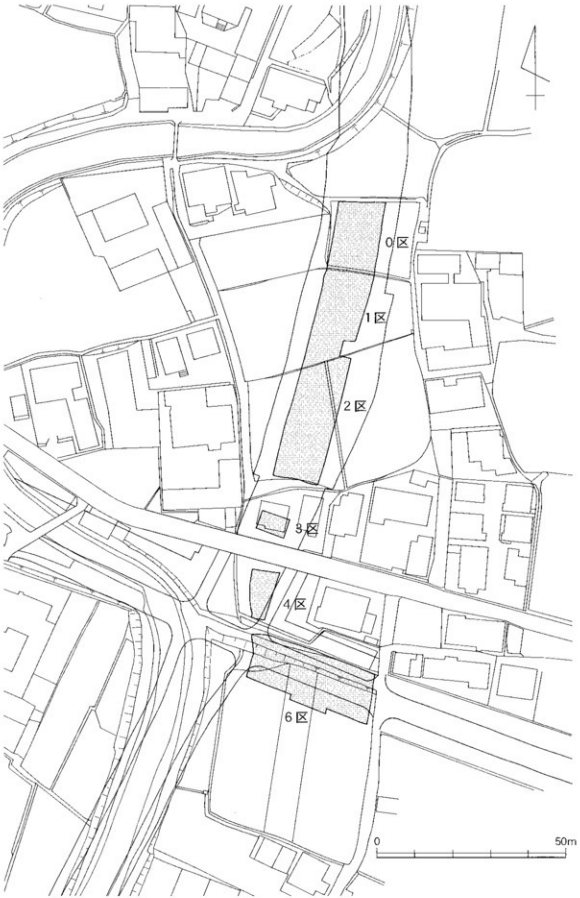
事業が激甚災害対策に伴うものであり、事業年度が限定されることから、発掘作業が終了した段階から洲本土木事務所と協議し、平成20年度の単年度で行うことで合意した。平成20年度になって洲本土木を所管する淡路県民局からの依頼を受け、平成20年6月4日付けで委託契約を締結し、整理作業を開始した。

整理作業は、遺物の水洗い作業から始め、ネーミング、接合、実測、復元、遺物写真撮影、遺構図補正、トレース等の作業を行い、9月末にはこれらの作業をほぼ終了した。その後は原稿執筆・本文レイアウトを行い、12月18日に報告書印刷の契約を行い、報告書の校正・印刷を行った。なお、遺構図補正以外のネーミングからトレースまでの作業は調査員の指示を受けて嘱託職員が実施し、遺構図補正・原稿執筆・本文レイアウトは調査員が行った。また遺物写真の撮影は㈱タニグチ・フォトに、木質遺物の樹脂同定は㈱パリノサーベイに、木質遺物の年代測定は加速器研究所に委託して実施した。

整理作業の体制

調査員　吉識雅仁　岡本一秀（保存処理担当）

嘱託職員　前川悦子　杉本淳子　藤川紀子　古谷章子



第2図　調査区配置図

第２節　遺跡の環境

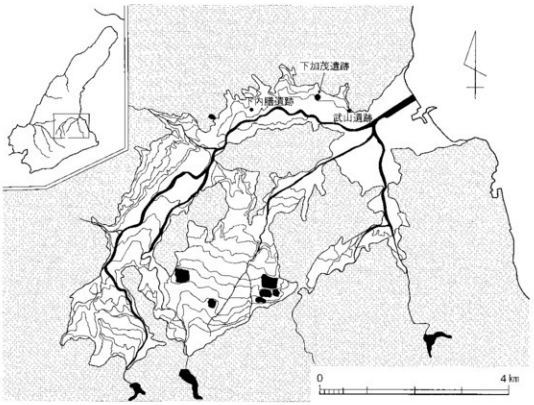
１．地理的環境

遺跡が所在する淡路島は兵庫県南部、瀬戸内海東部に浮かび、東は大阪湾に、西は播磨灘に、南は太平洋に面して浮かぶ。本州側とは明石海峡に、紀伊半島とは紀淡海峡に、四国とは鳴門海峡によって隔てられるが、昭和60年の大鳴門橋の開通によって四国とは陸続きになり、平成10年には明石海峡大橋の開通によって本州側とも陸続きになった。

島は北東一南北方向に細長い形状を呈し、島の中央から北半は津名山地と呼ばれる標高400～500ｍの山塊が背骨状に連なり、そのまま大阪湾・播磨灘に落ち込んで、平野部の少ない地形となっている。島の南端は諭鶴羽山を中心とする諭鶴羽山地が東西に連なり、山塊の南端は東西に伸びる中央構造線となって急激に太平洋に向かって落ち込んでいる。

両山地の間には、東西に細長い平野部が形成され、平野部の少ない淡路島にあっては比較的広い平野部が形成されている。この平野部は低い分水嶺によって東西に分割され、西は播磨灘に面した三原平野、東は大阪湾に面した洲本平野となっている。

遺跡は、これらの平野部の内の洲本平野側に位置する。洲本平野は洲本川水系に開けた平野部であり、西は中山峠、南は諭鶴羽山から東方に伸びる山塊に、北は先山山塊によって限られて、東側のみが大阪湾に向かって開口する。平野部内を流れる川は、諭鶴羽山塊の中央付近を源とする初尾川と鮎屋川が洲本市納で合流して洲本川となり、東に向きを変えて北東流し、大阪湾に注ぐ。途中、奥谷川、巽川、千種川などの支流が合流し、洲本平野の水はすべて洲本川に注ぎ込む形となる。



第３図　洲本平野の地形

第4図　調査区周辺の地形

洲本平野の地形は南西部の段丘地形、洲本川流域の沖積地、洲本川北岸の大阪層群の丘陵地帯からなる。南西部の段丘地形は鮎屋川の扇状地が段丘化したものであり、上面は南西から北東方向に緩く傾斜する。水田として利用するには灌漑施設等の整備が必要な土地であり、水田として開発されるのには時間を要したものと思われる。そのためか、沖積地を望む段丘縁を除けば、段丘上には古墳時代以前の遺跡は存在せず、以後の遺跡も窯跡等が知られているに過ぎない。北岸の丘陵地帯からは南東方向に扇状地が伸び、谷口には土石流性の扇状地が形成されている。洲本川流域の沖積地は縄文海進期には三角州と扇状地及び海域であり、その後の河川堆積物で、三角州・海域の陸化によって、現状のような地形が形成されている。

本調査の契機となった洲本川支流の巽川は領池花崗岩帯の先山の北麓を源とし、大阪層群の丘陵地帯を東流した後、南に向きを変えて丘陵地帯を抜け、平野部に流れ出て、洲本川に注ぐ。平野部に流れ出た谷口には標高約5m～10mの間に扇状地が形成され、上面は南東方向に傾斜する。扇状地末端は崖面が形成され、巽川の両岸沿いには顕著にみられ、今回の調査区の一部も扇状地末端の崖上にあたっている。

2．歴史的環境

洲本平野では旧石器時代の遺跡は現在知られておらず、淡路島全体でも極めて少ない。縄文時代の遺跡も数少ないが、洲本市武山遺跡は前期から中期の遺物が出土し、遺物のみの出土であったことから、その近辺に集落の存在が想定されている。

弥生時代前期の遺跡は本遺跡の他、武山遺跡・下内膳遺跡・波毛遺跡があり、4遺跡とも標高6m以上の扇状地上に位置している。武山遺跡は昭和48年に調査が行われ、竪穴状遺構が検出されている。また本遺跡では平成15年度の調査において、三角州を形成する扇上で水田が検出されている。これら平野部内の遺跡以外には丘陵上に位置する空の谷遺跡で前期新段階の遺物が出土している。

中期前半の遺跡分布は前期段階から大きく広がることはなく、前期段階に営みを始めた集落等がそのまま継続する。本遺跡と武山遺跡では中期前半の方形周溝墓が検出され、波毛遺跡では土壙が検出されている。中期後半になると遺跡分布は広がり、洲本川や千草川を遡って、ほぼ洲本川流域全体で展開されるようになる。下内膳遺跡や波毛遺跡のように前段階から継続し、波毛遺跡では竪穴住居跡等が検出されている。一方、先山南麓の尾根上にも集落が営まれ始め、大森谷遺跡・下加茂岡遺跡・寺中遺跡等が存在している。これらの集落はいずれも極めて短期間の存在であり、後期前半には断絶する。

後期前半の遺跡は洲本平野全体に少なく、ほとんど見当たらないような状況になる。後期後半には再び先山南麓の尾根上等に集落が営まれ、大森谷遺跡・寺中遺跡等のように、中期後半に集落が営まれた場所に戻ってくるような遺跡も存在している。寺中遺跡では竪穴住居跡と方形周溝墓が検出されており、集落と墓地の在り方を示す好資料である。

また淡路島の弥生時代の特徴として銅鐸の出土量の多さがある。現在淡路島全体で13遺跡から20口の出土が知られており、洲本平野でも3口の出土が知られている。

古墳は淡路島全体でも少なく、洲本平野でも例外ではない。特に大型古墳は存在せず、埴輪を樹立した古墳も存在していない。前期古墳はコヤダニ古墳があり、出土状況は不明であるが、三角縁神獣鏡を出土している。この他、宇山牧場1号墳は五朱銭・素文鏡が出土しており、前期に遡る可能性がある。

中期古墳は知られていない。後期古墳では群集するのは横穴式石室を埋葬施設とする下加茂岡古墳群のみで、他は疎らに存在している。その中で、曲田山古墳は島内最大規模の横穴式石室を有する。

古墳時代の集落遺跡としては、下内膳遺跡・波毛遺跡・森遺跡等が知られている。下内膳遺跡では前期の竪穴住居跡と水田が検出され、波毛遺跡では前期から中期の竪穴住居跡が検出されている。森遺跡は中期から後期の集落跡で、後期中頃の竈付の竪穴住居が検出されている。

また淡路島では製塩遺跡が多く確認されており、洲本平野でも旧城内遺跡・山下町居屋敷遺跡等、嘗ての海浜地域で確認されている。

律令期、淡路島は淡路国とされ、南海道の一国に編入される。淡路国衙は南淡路市の三原平野側に推定されている。国内は三原・津名の2郡とされ、洲本平野は津名郡に属し、郡衙は淡路市津名町志築に置かれたと想定されている。洲本平野には物部・加茂・広田の各郷が置かれ、物部郷は千草川流域、加茂郷が洲本川下流域から中流域に、広田郷が中流域から上流域に比定されている。物部郷には浦の記載があることから、その範囲は海沿いにまで及んでいたものと思われる。

南海道は諸説あってルートは定かではないが、紀伊から洲本市由良で島に上陸し、洲本平野を通過して、国衙のあった三原平野に至る点では共通している。途中、大野駅が置かれており、大野駅は洲本市大野付近に推定されている。

律令期の集落遺跡としては、加茂郷の比定地内に下内膳遺跡が存在している。これまでの調査で比較的規模の大きい掘立柱建物や墨書土器等が出土しており、洲本平野では最も官衙的な性格を持つ。

洲本市大野付近を中心とする段丘上には、牛瘻窯陶瓦跡・土生寺窯跡・新宮窯跡・官林窯跡等、律令期の須恵器・瓦窯が存在している。

律令体制が衰退すると、洲本平野でも物部荘・広田荘等の荘園が成立してくる。その中で遺跡の位置する加茂は「加茂郷」として国衙領に残されている。鎌倉時代、淡路の守護に佐々木氏が任命され、ついで細川氏の所領となる。細川氏が阿波の三好氏に滅ぼされると、淡路も三好氏の支配するところとなるが、その一方で、淡路の国人層も台頭し、洲本城や炬口城といった城跡が沖積地を望む丘陵上や段丘縁に残されている。

参考文献

田辺昭三「大野牛瘻須恵器窯について」『淡路考古学研究会誌1』1972年　淡路考古学研究会

岡本稔「淡路弥生式時代の研究―洲本川流域を中心として―」『淡路考古学研究会誌2』1974年　淡路考古学研究会

浦上雅史「曲田山古墳石室実測報告」『淡路考古学研究会誌2』1974年　淡路考古学研究会

田村昭治「旧城内遺跡」『淡路考古学研究会誌2』1974年　淡路考古学研究会

岡本稔「淡路島の上器製塩」『淡路地方史研究会会誌7』1970年

洲本市史編さん委員会『洲本市史』1974年

洲本市教育委員会『洲本市内遺跡分布調査概報Ⅰ』1983年

洲本市教育委員会『武山遺跡発掘調査報告』1974年

洲本市教育委員会『下内膳遺跡発掘ニュース1～3』1978年

洲本市教育委員会『山下町居屋敷遺跡発掘調査報告』1975年

兵庫県教育委員会『大森谷遺跡』1985年

兵庫県教育委員会『森遺跡』1988年

兵庫県教育委員会『寺中遺跡』1989年

兵庫県教育委員会『下内膳遺跡』1996年

兵庫県教育委員会『波毛遺跡・川添遺跡』2000年

第５図　遺跡の位置と周辺の遺跡

遺跡地名表

番号	名　称	時代	種類	番号	名　称	時代	種類	番号	名　称	時代	種類
1	下加茂遺跡	弥・中	集落	30	居屋敷遺跡	弥	散布	59	旧城内遺跡	弥・古	墳・産
2	武山遺跡	縄・弥	集落	31	山下町遺跡	弥	散布	60	山下町居屋敷遺跡	奈～中	生産
3	窄の谷遺跡	弥	散布	32	三木田池遺跡	弥	散布	61	酒本城跡	中～近	城跡
4	下内膳遺跡	弥～中	集落	33	清間遺跡	弥	散布	62	塩口城跡	中	城跡
5	脇遺跡	弥	散布	34	西の下遺跡	弥	散布	63	安宅館跡	中	城跡
6	下加茂岡遺跡	弥	集落	35	里池遺跡	奈	集落	64	羽風山城跡	中	城跡
7	野神遺跡	弥・奈	散布	36	曇華池遺跡	古～平	散布	65	勝間城跡	中	城跡
8	大森谷里池遺跡	弥	散布	37	西の森遺跡	平	散布	66	大森谷遺跡	弥～中	集落
9	方城遺跡	弥	集落	38	向上遺跡	奈	散布	67	新池遺跡	中	散布
10	新白遺跡	弥	散布	39	鵜根原遺跡	奈	散布	68	大谷遺跡	弥・中	散布
11	大森谷浜田遺跡	弥	散布	40	野上遺跡	奈・平	散布	69	大野遺跡	奈～平	散布
12	尾筋丸山遺跡	弥	散布	41	中村遺跡	弥・奈	散布	70	大坪遺跡	奈～平	散布
13	尾筋岡遺跡	弥	散布	42	明田遺跡	奈	散布	71	堀口台場跡	近	城跡
14	ハタ遺跡	弥	散布	43	コヤダニ古墳	古	古墳	72	桑間ナカダ遺跡	弥・中	散・産
15	森遺跡	弥・古・中	散布	44	下加茂岡群集墳	古	古墳	73	コカイチ遺跡	中	散布
16	大西遺跡	弥	集落	45	宇山古墳	古	古墳	74	由良木遺跡	弥・中	散布
17	薬師遺跡	弥	散布	46	下加茂岡古墳	古	古墳	75	中津原遺跡	弥・中	集・産
18	寺中遺跡	弥・中	集落	47	宇山牧場古墳群	古	古墳	76	毛次遺跡	弥	集落
19	二反田遺跡	弥	散布	48	曲田山古墳	古	古墳	77	山添城址	中	城跡
20	戸狩遺跡	弥	散布	49	明田丸山古墳	古	古墳	78	大宮寺奥の院跡	平	寺院
21	栗林遺跡	弥	散布	50	亀谷古墳	古	古墳	79	成福寺原東遺跡	古～中	散布
22	寺田遺跡	弥・古	散布	51	先山古墳	古	古墳	80	成福寺原遺跡	弥	散布
23	金屋宇山遺跡	弥	散布	52	バベの森古墳	古	古墳	81	宮の脇遺跡	弥	散布
24	尾崎遺跡	弥	散布	53	庄慶陶瓦窯跡	古・奈	生産	82	宮ノ下遺跡	弥	散布
25	亀谷山遺跡	弥	散布	54	宮林瓦窯跡	平	生産	83	中堂城址	中	城跡
26	馬木遺跡	弥・奈	散布	55	土生寺陶瓦窯跡	奈	生産	84	堂丸遺跡	弥生	散布
27	波毛遺跡	弥～中	集落	56	新宮窯跡	奈	生産	85	中田遺跡	中	他
28	太郎池遺跡	弥	散布	57	淡路御城山窯跡	近	生産	86	石ケ谷遺跡	古	生産
29	深田遺跡	弥	散布	58	宮崎遺跡	弥	生産				

第２章　調査の結果

第１節　遺構

１．概要

調査区は総面積約1,445㎡測るが、河川掘削部の調査区が南北に約130m、市道加茂中央線の改良にかかる区域が東西に約35m、総延長165mの細長いものである。

そのため、調査区の地形も地区によって異なり、扇状地上にあたる地区と、沖積低地の氾濫原にあたる地区に分かれる。扇状地上に当たるのは０区と６区であり、１区～４区は氾濫原にあたる。０区と１区の間には掘削前には約90cmの段差が認められた。４区と６区の間は沖積低地側の沖積作用が進んだことや、扇状地上が洲本川に向かって傾斜していることから、比高差はほとんどなくなっていたが、弧状を呈する畦畔に扇状地と沖積低地の氾濫原の境が看取できた。

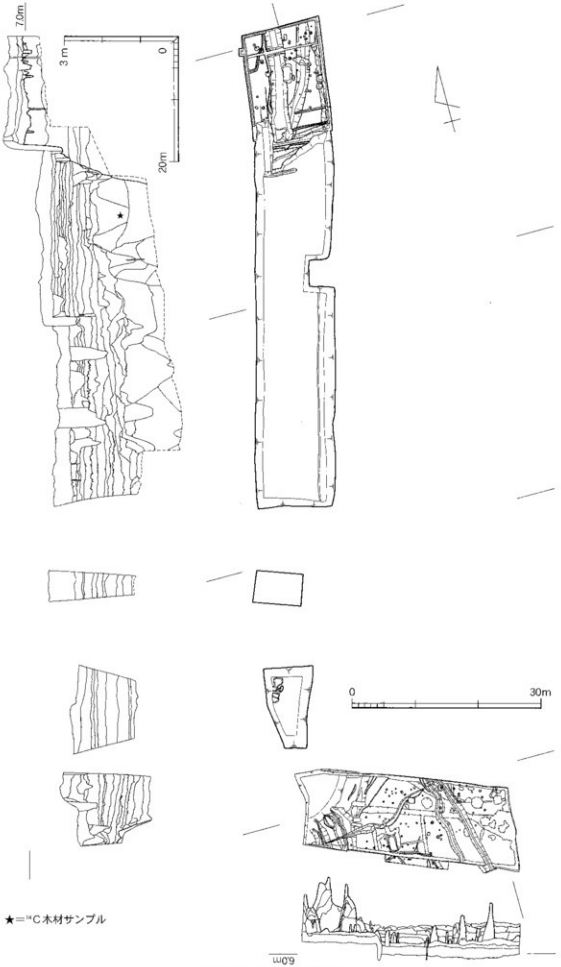
この地形の違いのため、土層の堆積状態も大きく異なり、扇状地上の０区では最下層に砂礫層、その上部に淘汰された黒色シルトや黄灰色極細砂等が互層状に水平に層厚約２m、標高約6.8mまで堆積する。この上部に混じりの多い灰色極細砂～細砂が堆積し、その上面は弥生時代中期以降の遺構面となる。６区では砂礫層までは確認していないが、０区と同様に黒褐色シルトと黄灰色極細砂の互層状の水平堆積が標高約5.2mまで確認でき、その上部にはシルト、細砂、細砂～中砂といった土層が細かく堆積し、その上面は弥生時代前期末～弥生時代前期前半以降の遺構面となる。こうした０区と６区の土層堆積からみて、黒色シルト等の淘汰された上層がほぼ水平に堆積する段階と、その上部の混じりの多い土層が堆積する段階では、土層の堆積条件が異なり、大きな環境の変化があったことが窺われる。

沖積低地の氾濫原にあたる調査区の土層は、表土下1.2～1.7m、標高で4.3～6.0mより上層では水田土壌と思われる土層と洪水に伴う砂等の堆積物が、互層になって堆積している。また水路も幾度も掘削し直された状態が看取でき、水田に開発された後も、度重なる洪水を受け、その度に水田や水路が修繕されていったことが窺われる。これ以下は旧流路が入り乱れた土層堆積状況であり、土層内部からは瓦器等の中世の遺物が出土している。流路の一部には木材片が含まれていたことから、C14の測定を行ったが、意外な年代が出ている。

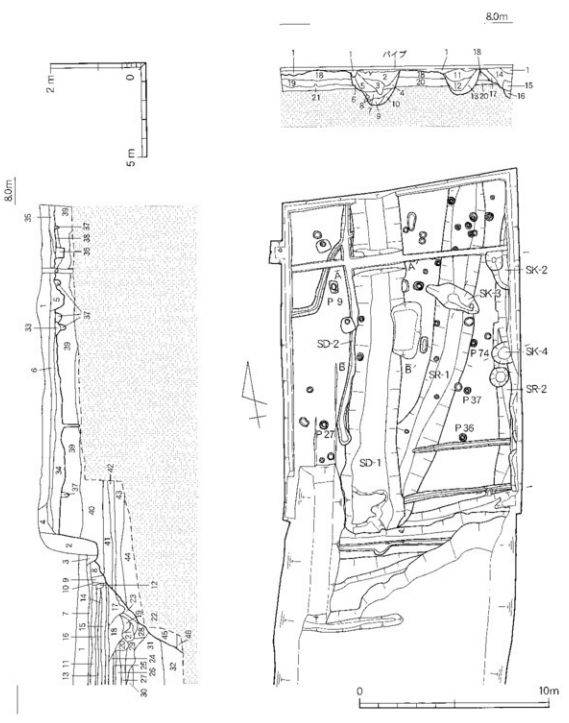
２．０区の遺構

調査対象地区の北端の調査区であり、調査前には１区とした南側の水田より約１m、西側の水田より約75cm、北側の水田より約20cm高くなっており、０区の水田一筆だけが沖積低地に向かって突出したような状態であった。このため、地上げ等が行われた可能性も考えたが、調査の結果、この水田面が本来から高く、扇状地上にあたり、南・西・北の水田は沖積低地あたることが判明し、周囲の崖状の地形はこの地形の変化に応じたものであることが判明した。

０区の遺構面は耕土・床土を除去した灰色極細砂～細砂の上面であり、この面で弥生時代中期の土壙・溝・流路、中世以降の柱穴・土壙等の遺構が検出されている。



第6図　調査区全体図



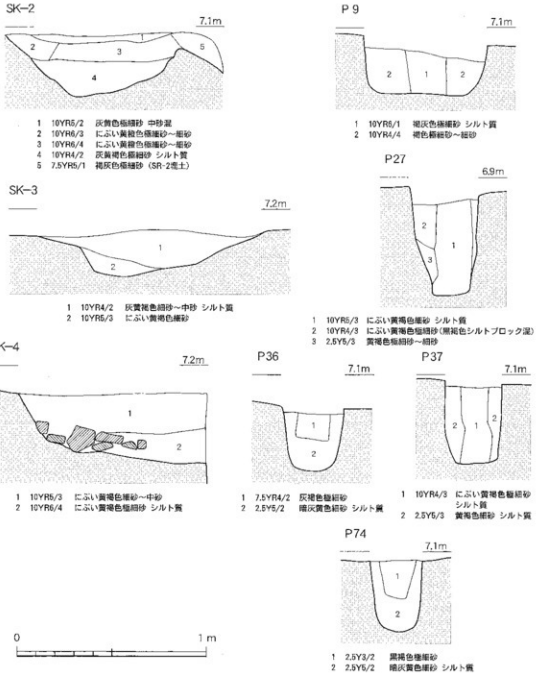
0区西壁

1 耕土
2 石垣及び石垣裏込め
3 屋瓦
4 建築
5 5Y6/3 オリーブ黄色極細砂～細砂（屋瓦）
6 床土
7 旧耕土
8 2.5Y7/3 浅黄色極細砂～極砂 黒褐色シルト混（水道）
9 2.5Y7/2 灰黄色極細砂～細砂
10 2.5Y6/3 にぶい黄色極細砂～細砂
11 10YR7/2 にぶい黄色極細砂～細砂
12 2.5Y6/3 にぶい黄色極細砂～細砂
13 5Y5/1 灰色極細砂～細砂 シルト質
14 10YR5/1 褐灰色極細砂～細砂
15 10YR5/2 灰黄褐色極細砂～細砂 シルト質（旧耕土）
16 10YR7/2 にぶい黄褐色極細砂～細砂（旧床土）
17 10YR6/4 にぶい黄褐色細砂～中砂
18 5Y6/1 灰色中砂 5～15cm大の原角礫含
19 2.5Y6/2 灰黄色細砂 極砂と中砂のラミナ
20 5Y6/1 灰色細砂～中砂
21 5Y6/2 灰オリーブ色細砂～中砂
22 5Y6/1 灰色細砂～中砂
23 10YR4/1 褐灰色細砂 シルト質
24 5Y7/2 灰白色細砂～細砂 ラミナ状態
25 2.5Y6/2 褐灰黄色極細砂～細砂
26 2.5Y6/3 にぶい黄色極細砂～細砂
27 2.5Y6/4 黄褐色細砂～中砂
28 10YR7/2 にぶい黄褐色極細砂～細砂
29 2.5Y6/3 にぶい黄色細砂
30 2.5Y6/2 灰黄色細砂
31 2.5Y7/3 浅黄色細砂～中砂
32 2.5Y7/1 灰白色中砂 10cm大の原角礫含（C14サンプル）
33 5Y6/2 灰オリーブ色細砂～中砂
34 7.5YR4/1 褐灰色細砂 2～5cmの角礫
35 床土
36 5YR4/1 褐灰色極細砂～細砂（柱穴）
37 5YR3/1 黒褐色極細砂～細砂（柱穴）
38 5Y5/1 灰色極細砂～細砂（土壌化）
39 7.5YR4/4 褐色細砂
40 10YR3/2 黒褐色シルト
41 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト
42 10YR4/2 灰黄褐色シルト
43 10YR3/1 黒褐色シルト
44 7.5Y6/3 淡黄色極細砂
45 10YR3/1 黒褐色シルト
46 7.5YR5/8 明黄色砂礫 6cm大までの原円礫

0区東西

1 パイプ堀り方
2 2.5Y6/1 灰白色細砂～細砂 小礫がラミナ状態で混
3 2.5Y7/1 灰白色細砂～極砂
4 2.5GY5/1 オリーブ灰色極細砂～細砂 シルト質 細砂混
5 N4/1 灰色極細砂～細砂 シルト質 細砂混
6 2.5GY5/1 オリーブ灰色極細砂 シルト質 細砂混
7 2.5Y5/1 黄灰色細砂～細砂 小礫含
8 2.5GY5/1 オリーブ灰色極細砂 シルト質含
9 2.5GY5/1 オリーブ灰色細砂～細砂
10 2.5GY5/1 オリーブ灰色極細砂～細砂
11 10YR6/1 褐灰色細砂 褐褐色シルト含
12 10YR5/1 褐灰色細砂 2cm大までの礫含
13 2.5Y4/1 黄灰色細砂 3cm大までの礫含
14 5Y5/1 灰色細砂～小礫
15 2.5GY5/1 オリーブ灰色極細砂 5cm大の円礫含
16 2.5GY4/1 褐オリーブ灰色極細砂 褐褐色シルト・3cm大の礫含
17 10YR5/4 にぶい黄褐色極細砂 シルト・細砂～小礫含
18 2.5Y6/1 黄灰色極細砂 シルト・細砂含
19 2.5Y6/1 黄灰色極細砂 細砂多含
20 10YR6/1 褐灰色極細砂 シルト含
21 10YR2/1 黒色シルト 極細砂多含

第7図　0区全体図



第８図　０区遺構断面図

ＳＫ－２

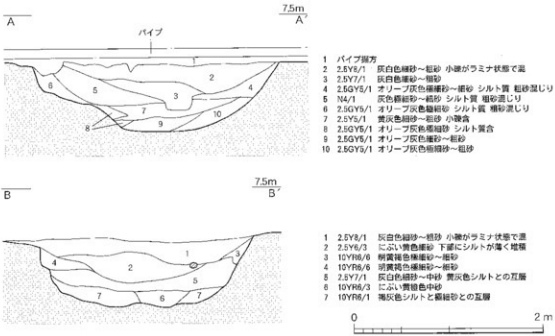
調査区の東端で、ＳＲ－２に切られた状態で検出された土壙である。平面形は不正形な楕円形状を呈し、南北約1.0m・東西0.9m、深さ約32㎝を測る。内部より４の深鉢形土器が出土している。

ＳＫ－３

ＳＲ－１上で検出された不正形な土壙である。長さ約3.0m・幅約1.3mの細長い楕円形を呈し、深さ約25㎝を測る。内部からは５～６の甕と壷が出土し、５の甕と６の壷口縁は比較的良好な状態である。

ＳＫ－４

調査区東端でＳＲ－２を切った状態で検出された土壙である。平面形はほぼ円形を呈し、規模は径約



1 パイプ南方
2 2.5Y8/1 灰白色細砂～粗砂 小礫がラミナ状態で混
3 2.5Y7/1 灰白色細砂～細砂
4 2.5GY5/1 オリーブ灰色極細砂～細砂 シルト質 粗砂混じり
5 N4/1 灰色極細砂～細砂 シルト質 粗砂混じり
6 2.5GY5/1 オリーブ灰色極細砂 シルト質 植物混じり
7 2.5Y5/1 黄灰色細砂～粗砂 小礫含
8 2.5GY5/1 オリーブ灰色極細砂 シルト質含
9 2.5GY5/1 オリーブ灰色極細砂～粗砂
10 2.5GY5/1 オリーブ灰色極細砂～粗砂

1 2.5Y8/1 灰白色細砂～粗砂 小礫がラミナ状態で混
2 2.5Y6/3 にぶい黄色細砂 下部にシルトが薄く堆積
3 10YR6/6 明黄褐色極細砂～細砂
4 10YR6/6 明黄褐色極細砂～細砂
5 2.5Y7/1 灰白色細砂～中砂 黄灰色シルトとの互層
6 10YR6/3 にぶい黄褐色中砂
7 10YR6/1 褐灰色シルトと極細砂との互層

第９図　０区ＳＤ－１断面図

1.1m・深さ約35cmを測る。内部には20cm大までの川原石が詰められて、近世以降の染付けが出土している。

ＳＫ－５

ＳＫ－４の南側で、ＳＫ－４とは20cmの間隔を開けて検出された円形の土壙で、規模は径約1.0m・深さ約28cmを測る。内部より近世以降の磁器が出土している。

柱穴群

調査区全体では約75個が検出され、ＳＲ－１の東側では南北方向の直線的に並ぶ柱列も認められたが、建物として復元するには至らず、全体でも掘立柱建物として復元できたものはない。柱穴埋土の色調は大きく黒褐色・褐灰色・にぶい黄褐色の３種に分けられ、弥生土器から中世に至る土器が出土している。

ＳＤ－１

調査区のほぼ中央を南北に検出された溝で、南端は削り取られ消失する。溝の規模は幅2.2～2.6m・深さ約70cmであり、南端は削り取られて崖となり、消失している。埋土は１・２層の上層と、それ以下の層に大きく分かれ、ともに水の流れあったことが窺われる堆積状態となっている。内部からは８～21の土器が出土しており、弥生時代中期後半には埋没したものと思われる。

ＳＤ－２

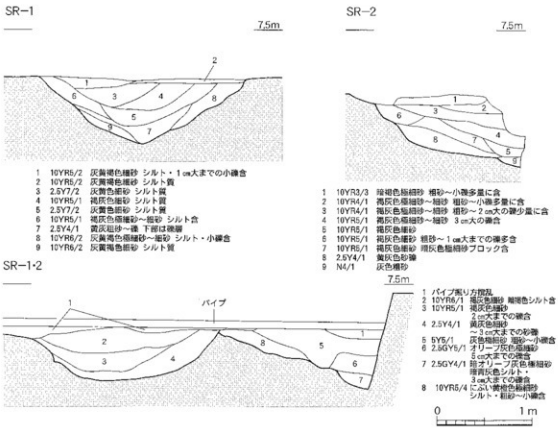
ＳＤ－１の西肩部で検出された幅30～60cm・深さ５cmの浅い溝で、南端はＳＤ－１上で消える。埋土は褐灰色細砂の一層であった。

ＳＤ－３

調査区南端の崖沿いに検出された東西走行の溝で、ＳＤ－１・ＳＲ－２を切って検出された幅約30cm・深さ７cmを測る。埋土は黒褐色細砂の一層であった。中世の須恵器・土師器の小片が出土している。

ＳＤ－４

ＳＤ－３の北側で、ＳＤ－３と約３mの間隔を開けて並行するように検出された東西走行の溝である。



第10図　0区ＳＲ－１・ＳＲ－２断面図

幅約45cm・深さ８㎝を測り、埋土はにぶい黄褐色細砂〜中砂の一層であった。内部から備前かと思われる陶器片が出土している。

ＳＲ－１

ＳＤ－１の東から調査区内に流入し、調査区南端でＳＤ－１に合流する形で終焉する流路である。幅約2.0m・深さ0.7mで、溝の中央部分では３層、北半部分ではより細かな土層の堆積が確認され、３〜４回程度の流れが確認できる。中期後半の壺口縁22と中期前半の壺体部23が出土しており、22はＳＤ－１から出土した壺口縁10と同一個体である。

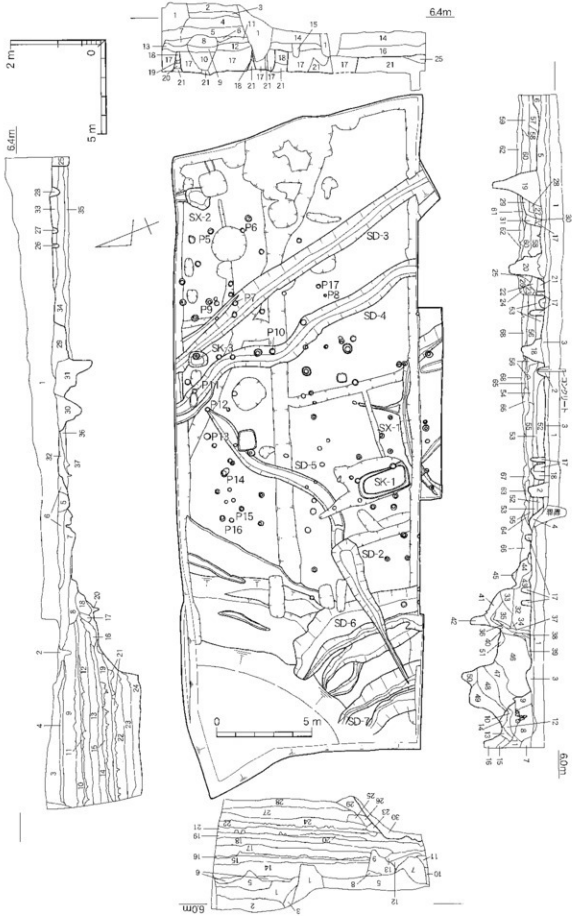
ＳＲ－２

調査区の東壁際沿いに西肩が検出され、南端は崖に削られて消失する。東肩は調査区外となって幅等については不明である。検出された部分での深さは70㎝を測り、土層の状態からは３〜４回程度の流れが確認でき、砂礫や砂の堆積が認められることから、比較的早い流れがあったものと思われる。24〜32の弥生時代前期から中期にかけての土器とＳ３の磨製石包丁が出土している。

３．６区の遺構

調査対象地区の南端にあたる調査区で、大部分が地形的には段丘化した扇状地上にあたるが、調査区の北西隅部は４区から連続する段丘下の沖積低地にあたる。平成15年度の調査で方形周溝墓や弥生前期の水田が検出された地区に西接する地区であり、調査はこの時の調査データーを参考に進めた。

調査前の状況は、北半は旧淡路鉄道の線路敷きで台形状に高く、南半は水田で、西半の1/3が約30


6.4m
2 m
0
5 m
SX-2
P5
P6
SD-3
P17
P8
P7
P9
SD-4
P10
SX-3
P11
P12
SX-1
P13
SD-5
SK-1
P14
P15
P16
SD-2
SD-6
SD-7
0
5 m
6.0m

第11図　6区全体図

6区土層名表

6区西壁

1	線路側溝	
2	線路敷バラス	
3	10BG4/1	暗青灰色細砂
4	盛土	
5	耕土	
6	10YR7/4	にぶい黄橙色極細砂～細砂（床土）
7	10YR5/2	灰黄褐色極細砂 シルト質
8	10YR5/3	にぶい黄橙色極細砂
9	10YR5/1	褐灰色極細砂～中砂 シルト質
10	7.5YR4/4	褐色細砂 シルト質
		2～3㎝大の礫混
11	7.5YR5/1	褐灰色極細砂～細砂 シルト質
12	10YR6/2	灰黄褐色極細砂～細砂 シルト質
13	10YR6/1	褐灰色極細砂～細砂 シルト質
14	2.5Y5/3	黄褐色極細砂 シルト質
15	2.5Y4/3	オリーブ褐色極細砂～中砂
16	2.5Y8/3	淡黄色細砂～粗砂
17	2.5Y6/1	黄灰色極細砂～細砂 シルト質
18	10YR5/1	褐灰色極細砂～中砂 シルト質
19	10YR4/1	褐灰色極細砂～中砂 シルト質
20	10YR7/3	明褐灰色極細砂～中砂
21	10YR5/1	褐灰色極細砂～中砂 シルト質
22	10YR7/3	明褐灰色極細砂～中砂
23	10YR7/2	にぶい黄橙色極細砂～中砂
24	10YR6/1	褐灰色極細砂～細砂 シルト質
25	5B5/1	青灰色極細砂～細砂 シルト質
26	10YR7/2	にぶい黄橙色極細砂～中砂
27	10BG6/1	青灰色極細砂～細砂 シルト質
28	5PB3/1	暗青灰色中砂～粗砂
29	2.5Y6/2	灰黄色粗砂
30	10YR3/2	黒褐色シルト

東壁

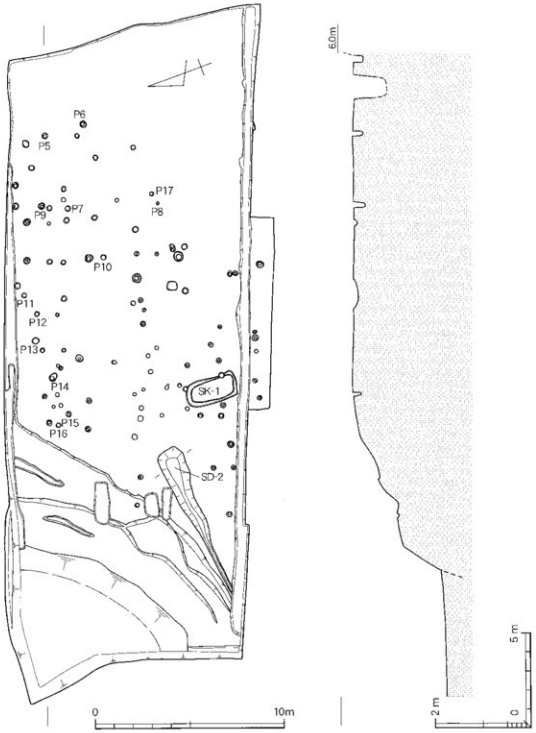
1	撹乱	
2	5Y6/1	灰色中砂混じり細砂
3	10YR7/4	にぶい黄橙色盛土 ガラ混
		（線路盛土）
4	円礫バラス（線路盛土）	
5	10YR5/2	にぶい黄橙色盛土 バラス混
		（線路盛土）
6	石灰	
7	N6/	灰色極細砂～細砂
8	10Y6/1	灰色極細砂 よく締まる
9	10YR6/2	オリーブ灰色極細砂 よく締まる
10	撹乱	
11	2.5Y6/1	黄灰色極細砂 シルト質
12	2.5Y6/2	灰黄色極細砂 シルト質
13	2.5Y6/2	灰黄色極細砂～細砂
14	耕土	
15	5Y6/1	灰色中礫細砂～細砂 シルト質
16	2.5Y6/2	灰黄色極細砂～細砂
17	近世墓坑	
18	5Y5/1	灰色中砂混じり細砂
19	2.5Y6/3	にぶい黄色細砂～中砂
20	2.5Y5/3	黄褐色極細砂～細砂
21	10YR5/2	灰黄褐色細砂～中砂

南壁

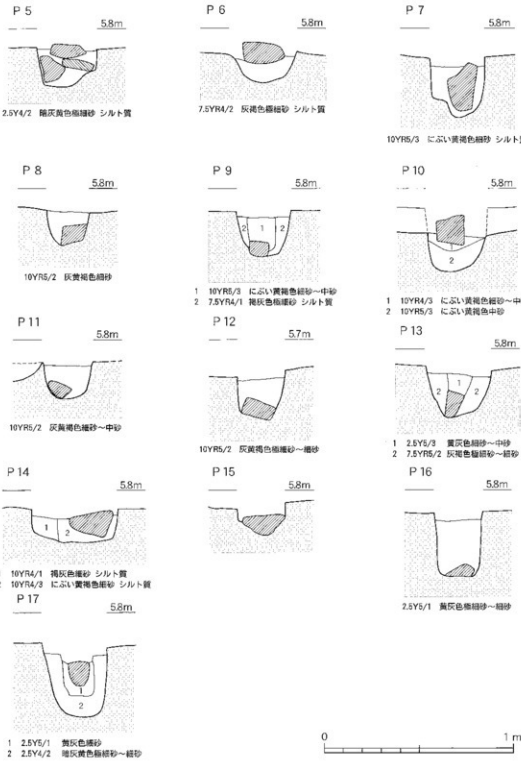
1	耕土	
2	撹乱	
3	10YR7/4	にぶい黄橙色極細砂～細砂
4	10YR5/2	灰黄褐色極細砂 シルト質
5	10YR6/2	灰黄褐色細砂～中砂
6	7.5YR5/1	褐灰色極細砂～細砂
7	7.5YR4/4	褐色細砂
8	7.5YR4/3	褐灰色極細砂～細砂 シルト質
9	10YR5/2	灰黄褐色細砂 シルト質
		粗砂多含
10	10YR5/3	にぶい黄褐色極細砂～中砂
11	7.5YR5/1	褐灰色極細砂～細砂 シルト質
12	10YR5/3	にぶい黄褐色細砂～中砂
		5㎝大の亜角礫混
13	10YR4/3	にぶい黄橙色極細砂～細砂
		シルト質
14	10YR4/3	にぶい黄橙色極細砂 シルト質
15	7.5YR5/1	褐灰色極細砂～細砂
		3～5㎝大の亜角礫
16	2.5Y5/3	黄褐色細砂～中砂
17	10YR5/2	灰黄褐色細砂（柱穴埋土）
18	10YR4/1	褐灰色極細砂～細砂（SD-1埋土）
19	SD-3埋土	
20	SD-4埋土	
21	2.5Y6/2	灰黄色極細砂
22	2.5Y6/4	にぶい黄色極細砂～細砂
23	10YR6/6	明黄褐色細砂～中砂
24	10YR5/6	黄褐色シルト混じり中砂
25	2.5Y7/1	灰白色極細砂～細砂
26	5Y7/2	灰白色細砂～中砂
27	10YR7/2	にぶい黄橙色細砂～中砂
28	10YR5/2	灰黄褐色細砂～中砂
29	10YR5/1	褐灰色極細砂～細砂
30	10YR5/3	にぶい黄褐色細砂
31	10YR5/1	褐灰色細砂シルト質
32	2.5Y7/3	浅黄色極細砂
33	10YR6/3	にぶい黄褐色極細砂と中砂の互層
34	10YR7/4	にぶい黄橙色極細砂～細砂
35	2.5Y6/2	灰黄色中砂
36	5Y6/3	オリーブ黄色細砂 シルト質
37	2.5Y6/3	にぶい黄色極細砂～細砂
38	10YR5/3	にぶい黄褐色極細砂～細砂
39	10YR5/2	灰黄褐色細砂
40	2.5Y6/4	にぶい黄色極細砂～細砂
41	2.5Y5/2	黄灰色中砂 1～3㎝大の礫混
42	2.5Y5/1	黄灰色中砂
43	10YR5/2	灰黄褐色極細砂
44	10YR5/2	灰黄褐色極細砂
45	2.5Y5/3	黄褐色細砂～中砂
46	10YR5/4	にぶい黄褐色極細砂～中砂
		下部に中砂多
47	10YR6/2	灰黄褐色細砂～粗砂
		7～10㎝の亜角礫混
48	10YR6/1	褐灰色中砂
49	10YR6/1	褐灰色中砂～粗砂
		5～20㎝の亜角礫混
50	10YR5/2	灰黄褐色中砂
51	2.5Y6/3	にぶい黄色中砂 青黒シルト混
52	2.5Y7/4	浅黄色極細砂
53	2.5Y6/2	灰黄色極細砂
54	2.5Y7/2	灰黄色極細砂～中砂
55	2.5Y7/2	灰黄色極細砂
56	2.5Y6/1	黄灰色極細砂～細砂 シルト質
57	7.5YR5/1	褐灰色極細砂～細砂 シルト質
58	10YR5/6	黄褐色極細砂～細砂
59	2.5Y6/2	灰黄色細砂
60	10YR5/2	灰黄褐色細砂～中砂
61	2.5Y4/2	暗灰黄色極細砂～細砂
62	2.5Y6/2	灰黄色シルト
63	2.5Y7/6	明黄褐色極細砂～中砂
64	2.5Y7/6	明黄褐色極細砂～細砂
65	5Y5/2	灰オリーブ色極細砂
66	2.5Y6/1	黄灰色極細砂～中砂 シルト質
67	2.5Y7/1	灰白色中細砂
68	5Y7/1	灰白色極細砂～細砂

北壁

1	盛土	
2	撹乱	
3	耕土	
4	10YR7/4	にぶい黄橙色極細砂～細砂（床土）
5	撹乱	
6	10YR7/2	にぶい黄橙色細砂
7	5B6/1	青灰色細砂 シルト質
8	10YR5/1	褐灰色極細砂
9	2.5Y5/3	黄褐色極細砂 シルト質
10	2.5Y4/3	オリーブ褐色極細砂～中砂
11	2.5Y8/3	淡黄色細砂～粗砂
12	2.5Y6/1	黄灰色極細砂～細砂 シルト質
13	10YR5/1	褐灰色極細砂～中砂 シルト質
14	10YR4/1	褐灰色極細砂～中砂 シルト質
15	10YR7/3	明褐灰色極細砂～中砂
16	10BG7/1	明青灰色極細砂
17	5BG4/1	青灰色極細砂
18	10BG6/1	青灰色細砂
19	10YR6/1	褐灰色極細砂～細砂 シルト質
20	5B5/1	青灰色細砂～粗砂 シルト混
21	10YR7/3	明褐灰色極細砂～中砂
22	10YR6/1	褐灰色極細砂～細砂 シルト質
23	10BG6/1	青灰色極細砂～細砂 シルト質
24	5PB3/1	暗青灰色中砂～粗砂
25	撹乱（近世墓坑）	
26	10YR5/1	褐灰色極細砂～細砂 シルト質
27	10YR4/2	灰黄褐色極細砂～細砂
		ラミナ状堆
28	SD-8	
29	10YR5/4	にぶい黄褐色極細砂～細砂
30	SD-4	
31	SD-3	
32	7.5YR6/4	にぶい橙色細砂～中砂
33	5Y5/2	灰オリーブ極細砂～細砂
34	10YR5/2	褐灰色極細砂～細砂 シルト質
35	2.5Y6/2	灰黄色シルト
36	7.5YR7/2	明褐灰色極細砂～細砂 シルト質
37	10YR3/2	黒褐色シルト



第12図　6区中世の遺構全体図



第13図　6区柱穴断面図

cm低くなって、線路敷きとの間に弧を描く畦畔が確認でき、これが0区から連続してくる段丘状の崖面であると推定できた。

この北西隅を除けば、遺構検出面は盛土や耕土・床土を除去した下面にあり、ほぼ平らであるが、北東隅が最も高く標高約5.7m、そこから南西に緩く傾斜し、南西部での遺構検出面は標高約5.5mを測る。ただ、遺構検出面の土層は一定せず、南壁側は土石流性の堆積物による細かな土層堆積が確認でき、北壁側は土壌化した上層が、東壁際は近世以降の円形土壙が多数設けられて、遺構面が検出できないような状況であった。

遺構面を形成する土石流性の堆積物の下は淘汰された黒褐色シルトであり、さらにその下に黄灰色極細砂と黒褐色シルトが互層になって1.5m以上の厚さに堆積しているのが、沖積地に落ち込む崖面で確認されている。こうした状況は0区と共通しており、0区と6区が同じ地形に位置していることを示している。

平成15年度の調査では土石流堆積物下の黒褐色シルト上で水田が確認されたとのことであり、そこまで掘り下げたが、黒褐色シルト上では遺構は確認できなかった。

北西隅部は遺構検出面から崖上となって落ち込み、約1.5mの厚さで水田土壌と洪水砂が交互に堆積する状況であり、こうした状況は1～4区の土層堆積と同様の堆積状況である。また崖沿いに水路が設けられ、水田の高さに合わせて修繕されているのも、0区と1区の間の崖面の状況と同様である。これらの水田土壌と洪水砂を標高約3.8mまで掘り下げたが、青灰色砂層となったため、調査を断念した。

検出された遺構は弥生時代中期～中世までのものであり、弥生時代中期初頭の遺構としては溝や流路が、弥生時代中期の遺構としては円形周溝墓と方形周溝墓が、中世の遺構としては柱穴群や土壙・溝が検出されている。

（1）中世の遺構

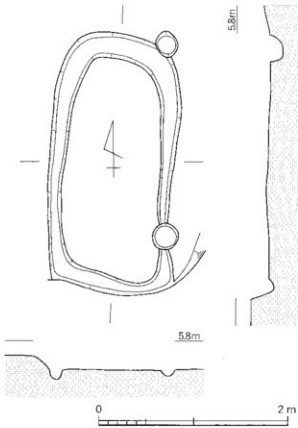
柱穴約100個、土壙3基、溝1本が検出されているが、掘立柱建物として復元できたものがなく、遺構相互の関連性については明らかにできなかった。

柱穴群

約100個が検出され、中には柱抜き取り後に礫を詰め込んだものが存在していたことから、これらを手がかりに、建物跡の復元を試みたが、結果的には掘立柱建物として復元できたものはない。柱穴内から出土した土器は小片ばかりであるが、律令期・平安時代末～鎌倉時代・室町時代後期に属するものが出土している。

ＳＫ－１

深さ28cmの攪乱坑の底から隅丸方形に巡る溝が検出され、柱穴に切られていることから、遺構として扱った。溝は幅15～30cm・深さ8



第14図　6区ＳＫ－１

～15㎝を測り、南北2.8m・東西1.34mの隅丸方形に巡らされていた。

ＳＫ－２

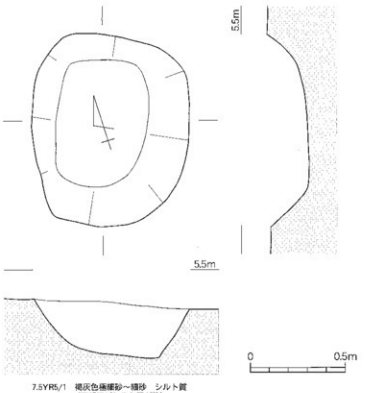
Ｐ１に切られて検出された方形の土壙で、規模は東西106㎝・南北95㎝・深さ20㎝を測る。埋土は灰色極細砂の一層であった。

ＳＫ－３

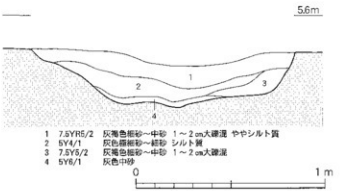
弥生時代前期の溝ＳＤ－３を切り、中世の柱穴に切られて検出された土壙である。規模は南北105㎝・東西85㎝・深さ27㎝を測る。埋土は褐灰色極細砂～細砂の一層であった。

ＳＤ－２

調査区南西隅の崖上部で、崖に並行するように北東―南西走行する直線的な溝である。溝幅は0.25～1.3m、深さは４～44㎝を測る。長さ8.3mに渡って検出され、東端が幅広く、そこから西に行くほど幅を減じ、深さも東端が最も深くなっている。埋土は灰色あるいは灰褐色を呈する４層に分けられ、底には薄く中砂が堆積していた。水田に伴う溝の可能性が高い。



第15図　６区ＳＫ－３



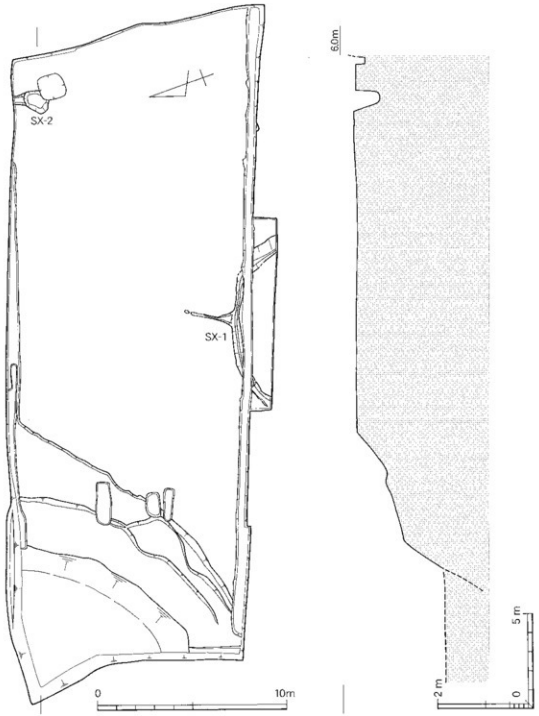
第16図　６区ＳＤ－２断面図

（２）弥生時代中期の遺構

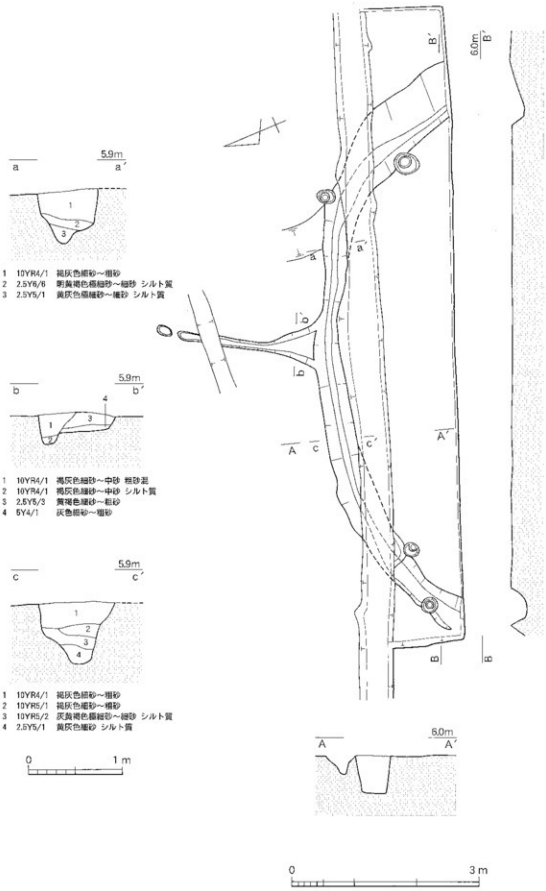
地区が墓域に利用されていた時期であり、円形周溝墓と方形周溝墓の一部と思われる遺構が検出されている。平成15年度の調査において検出された方形周溝墓群と一連となるものである。

ＳＸ－１

調査区中央南端では幅幅30～80㎝・深さ30㎝の溝が弧状に検出された。溝の埋土は下層に黄褐色や灰黄褐色・黄灰色を呈する極細砂～粗砂が薄く堆積し、上層には褐灰色を呈する細砂～粗砂が一気に堆積した状態であった。溝内側の肩部間は最長7.6mを測り、円弧で囲まれた内部には主体部等の施設はなく、また溝内部から土器等の出土もなかった。このため、この溝の性格を断定することはできないが、溝を弧状に巡らす遺構としては円形周溝墓もしくは古墳の周溝の可能性が考えられ、本遺跡には周溝墓が存在することから、この溝は円形周溝墓の周溝である可能性が高い。溝の描く円弧から復元すれば、



第17図　6区弥生時代中期の道構


5.9m
a
a′
1
2
3
1 10YR4/1 褐灰色細砂～粗砂
2 2.5Y6/6 明黄褐色極細砂～細砂 シルト質
3 2.5Y5/1 黄灰色極細砂～細砂 シルト質
5.9m
b
b′
4
1
3
1 10YR4/1 褐灰色細砂～中砂 粗砂混
2 10YR4/1 褐灰色細砂～中砂 シルト質
3 2.5Y5/3 黄褐色細砂～粗砂
4 5Y4/1 灰色細砂～粗砂
5.9m
c
c′
1
2
3
4
1 10YR4/1 褐灰色細砂～粗砂
2 10YR5/1 褐灰色細砂～粗砂
3 10YR5/2 灰黄褐色極細砂～細砂 シルト質
4 2.5Y5/1 黄灰色細砂 シルト質
0
1 m
B′
6.0m
B
a
a′
b
b′
A
c
c′
A′
B
B′
6.0m
A
A′
0
3 m

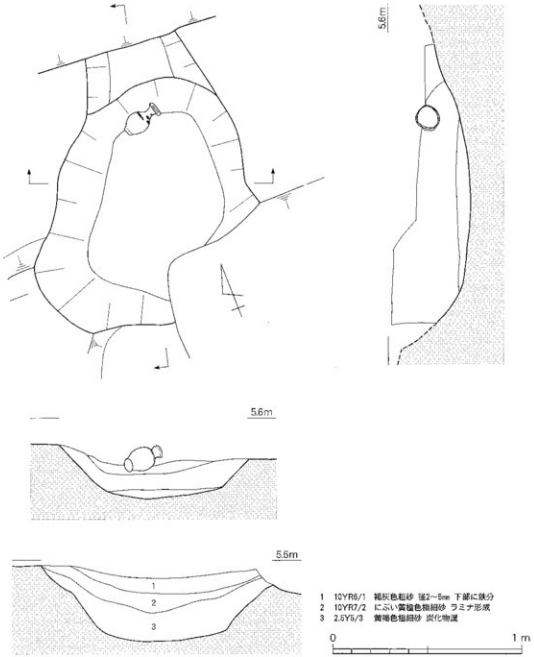
第18図　6区ＳＸ－１

円形周溝墓の径は溝内側の肩部で約12mとなる。

溝の中央付近からは幅約15cm・深さ5～12cmの細い溝が北へ直線的に2.5m伸び、そこで途切れている。この溝の埋土はＳＸ－１の埋土と同様であり、この溝も周溝墓に伴うものである可能性もある。

ＳＸ－２

調査区の北東隅付近で、細い溝が取り付いた土壙状の遺構として検出されたものである。土壙状の部分から体部下半が穿孔された土器が出土したことから、溝のコーナー部分が深くなった方形周溝墓の溝の一部と考えている。溝は長さ1.5mが検出され、浅い部分は南北方向し、深い部分はやや西方向に曲



第19図　６区ＳＸ－２

がっている。この形状からすれば、検出されたのは周溝墓の南東隅部である可能性が高い。浅い部分は幅50cm・深さ10cmであり、一段深くなった部分は不整形な楕円形状を呈し、長さ145cm・幅95cm・深さ22cmを測る。

溝の埋土は、土壙状に深くなった部分で、上層に粗い砂が、中層にはにぶい黄橙色極細砂が鉢砂とラミナ状態となって、下層には黄褐色極細砂が堆積していた。中層以上は水の影響が考えられるが、他の遺構の埋土にも、遺構面上でも、こうした土層の堆積は確認されていない。

溝が土壙状に深くなった部分の北端から、体部下半が穿孔された壷62が中層上に乗った形で出土している。器表は風化し、文様も不鮮明になっている。

(3) 弥生時代前期末～中期初頭の遺構

この時期に該当する遺構には溝1本と自然の流路4本がある。

SD－3

調査区を北西から南東に横断する形で検出された溝である。幅2.0～2.4m・深さ1.2mを測り、断面は2段となる部分もあるが「V」字形を呈する。埋土はシルト・極細砂を基本とし、最下層の上に中砂の堆積もみられる。

口縁下に突帯を施した深鉢63や壷底部64が出土している他、溝南端の底から長さ2.2m・太さ20cmの樹木が、溝と並行し、樹木の下に小型材をかますようにした状態で出土している。樹種同定の結果、樹木はカヤ材と判明している。

溝は直線的であり、断面がV字形であることから、人工的な溝と考えているが、用途については不明である。

SD－4

SD－3の西で、ほぼSD－3と並行する形で検出された溝であるが、SD－3とは異なって、途中は蛇行を繰り返す。溝は幅80～110cm・深さ30cmを測り、砂を中心とした埋土であった。

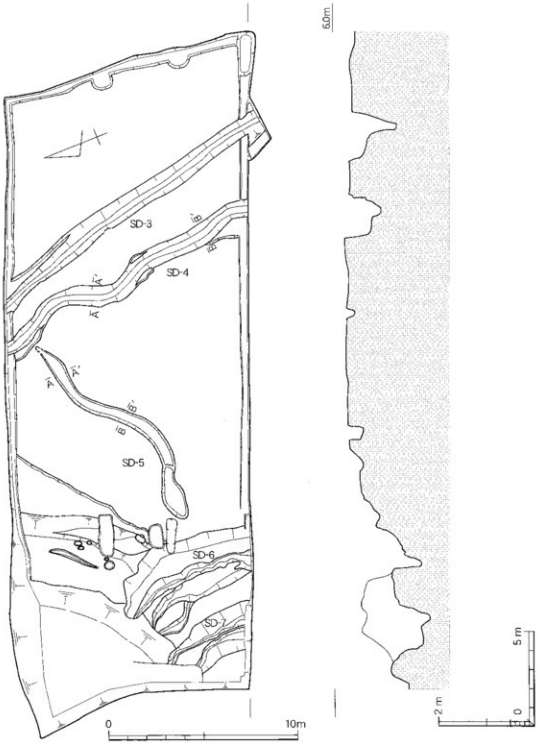
65の弥生土器甕が出土している。

SD－5

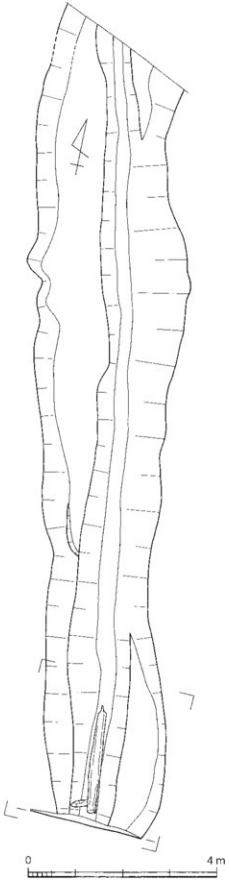
調査区の中央で、北東から南西方向に蛇行して検出された溝である。幅70～80cm・深さ15cmの溝で、砂層を中心とした埋土であった。

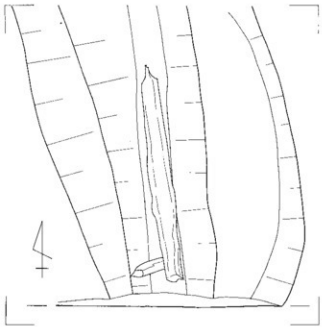
SD－6・7

調査区の南西隅で検出された流路で、土層の堆積状況から見て、当初SD－7であった流れが、徐々に東に移動し、SD－6となって埋没したものと思われる。北端は崖に削られて消失している。ともに埋土は砂を中心とし、底は水の流れによって抉られて一段深くなっている。最終的なSD－6は幅3.0m・深さ65cmを測る。SD－6とした部分からは66～71の土器類が、SD－7としたSD－6部分を除く部分では73～77の土器類が出土している。

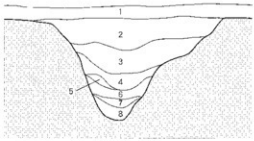


第20図　6区弥生時代前期～中期初頭の遺構



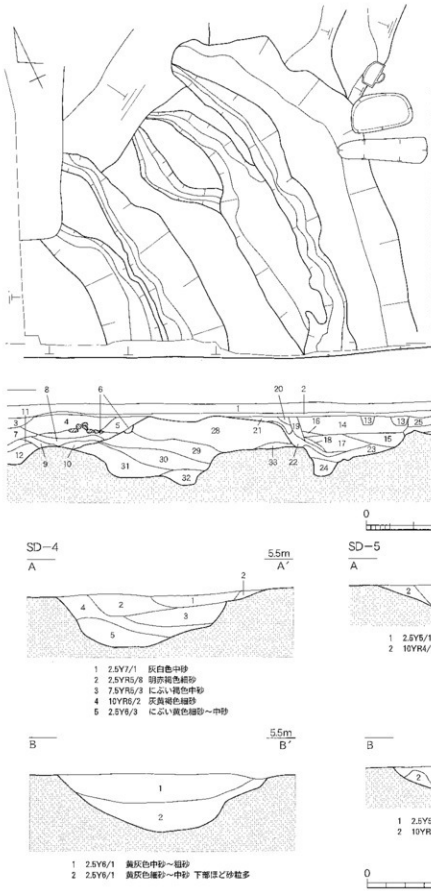


6.3m



1　5Y5/4　　オリーブ黄色細砂（床土）
2　10YR5/2　灰黄褐色極細砂～細砂 シルト質 2～3㎝の礫混
3　10YR5/1　褐灰色極細砂～細砂
4　2.5Y5/1　黄灰色細砂 シルト質
5　2.5Y4/1　黄灰色極細砂 シルト質 2～3㎝大の礫混
6　7.5Y4/1　灰色極細砂シルト質
7　7.5Y6/1　灰色中砂
8　5Y5/1　灰色シルト

第21図　6区ＳＤ－３


1 耕作土
2 10YR7/4 にぶい黄橙色極細砂～細砂（床土）
3 7.5YR4/4 褐灰色極薄 シルト質 2～3 cmの石混
4 7.5YR4/3 褐色極細砂～細砂 シルト質
5 10YR5/2 灰黄褐色細砂 シルト質 根粒含
6 10YR6/3 にぶい黄褐色極細砂～中砂
7 7.5YR5/1 褐灰色極細砂～細砂 シルト質
8 10YR5/3 にぶい黄褐色極砂～中砂 5 cmの亜角礫混
9 10YR6/3 にぶい黄橙色極細砂～極砂 シルト質
10 10YR3/3 にぶい黄褐色極細砂 シルト質
11 7.5YR5/1 褐灰色極細砂～細砂 3～5 cmの亜角礫混
12 2.5Y5/2 暗褐色細砂～中砂
13 10YR4/1 褐灰色極細砂（住穴埋土）
14 2.5Y7/3 浅黄色極細砂 炭化物混
15 10YR5/3 にぶい黄褐色極砂と中砂の互層
16 10YR7/4 にぶい黄橙色極細砂～細砂
17 2.5Y6/2 灰黄色中砂
18 5Y6/3 オリーブ黄色細砂 シルト質
19 2.5Y5/3 にぶい黄色極細砂～礫砂
20 10YR5/3 にぶい黄褐色細細砂～細砂
21 10YR5/2 灰黄褐色細砂
22 2.5Y5/4 にぶい黄色極細砂～細砂
23 2.5Y5/2 暗灰黄色中砂 1～3 cm大の礫混
24 2.5Y5/1 黄灰色中砂
25 10YR5/2 灰黄褐色極細砂
26 10YR5/2 灰黄褐色極細砂
27 2.5Y5/3 黄褐色細砂～中砂
28 10YR5/4 にぶい黄褐色極細砂～中砂 下層の砂粒が大
29 10YR5/2 灰黄褐色細砂～粗砂 7～10cm大の亜角礫混
30 10YR6/1 褐灰色中砂
31 10YR6/1 褐灰色中砂～粗砂 5～20cm大の亜角礫混
32 10YR5/2 灰黄褐色中砂
33 2.5Y4/3 にぶい黄色中砂 地山土混
6.0m
0
4 m
SD－4
A
A′
5.5m
1 2.5Y7/1 灰白色中砂
2 2.5YR5/8 明赤褐色細砂
3 7.5YR5/3 にぶい褐色中砂
4 10YR6/2 灰黄褐色細砂
5 2.5Y6/3 にぶい黄色細砂～中砂
SD－5
A
A′
5.5m
1 2.5Y6/1 黄灰色中砂
2 10YR4/1 褐灰色極細砂～細砂
B
B′
5.5m
1 2.5Y6/1 黄灰色中砂～粗砂
2 2.5Y6/1 黄灰色細砂～中砂 下部ほど砂粒多
B
B′
5.5m
1 2.5Y5/1 黄灰色中砂
2 10YR4/1 褐灰色極細砂～細砂
0
1 m

第22図　6区ＳＤ－４～７

第２節　遺物

１．概要

土器類・土製品類・金属製品類・石製品が出土しているが、全体的な量は少ない。これらの遺物は、断絶しながらも弥生時代から室町時代までの継続しており、弥生時代前期から中期までの遺物と中世前期の遺物の量が比較的に多くなっている。弥生時代前期から中期の遺物は０区と６区で出土し、方形周溝墓から出土した壺62以外は溝や流路、包含層から出土している。中世前期の遺物は柱穴等から出土しているが、段丘崖を埋める包含層から多くが出土している。

出土地区では遺構が検出された０区・６区からの出土したものが大半を占め、沖積低地に当たる１～４区から出土した遺物は極めて少量である。特に３・４区からは遺物の出土もほとんど認められなかった。出土状態では０区・６区の柱穴・土壙・溝といった遺構内から出土した遺物と、段丘崖が埋没する過程で投棄されるなどした包含層から出土したものがある。ただ、遺構内から出土したものでは流路を含めた溝内から出土したものが多く、柱穴・土壙内からの出土は極めて少ない。また、柱穴内から出土したものは小片が多く、図化が不可能なものが多くなっている。

以下、土器類・土製品類・金属製品・石製品の順に、各地区・遺構毎に記述する。

２．土器・土製品類

（１）０区出土土器

柱穴出土土器

０区で検出された柱穴はそれほど多くなく、建物跡としても復元できていないが、１～３の土器が出土している。

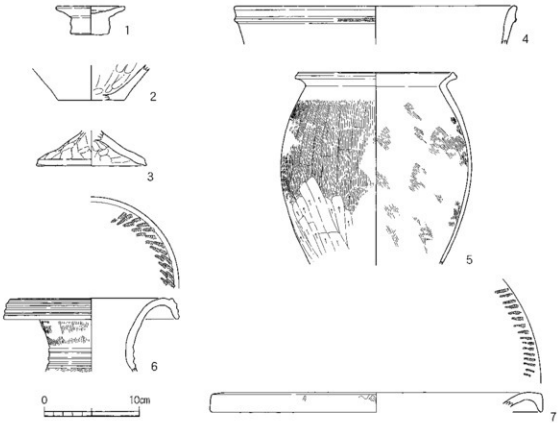
１はP20から出土した土師器の台付皿で、浅い小皿の底部に円柱状の台部が付く。台部は径４㎝・高さ1.7㎝であり、ほぼ垂直に立ち上がるが、粘土の重みでたわみが生じたためか、中程で外側に膨らんでいる。口縁部は浅く斜め横上方に開き、中央がやや外反する。台部の底部外面は回転糸切りにより切り離し、外面はナデ調整、皿部はやや強い回転ナデによって凹凸が激しい。皿部の口縁部と台部の接合面にはひび割れが生じていることから、円柱状の台部に皿部の口縁部となる粘土を継ぎ足し、台部の上部から口縁部を回転ナデによって整形したものとみられる。

２はP39から出土した平底の底部である。外面には篦ミガキの痕跡が残り、内面は縦方向になで上げられている。底部内面には指押さえ痕が残る。立ち上がりの角度から見て壺の底部になるものと思われる。

３はP59から出土した弥生土器の壺である。頂部は欠く。口縁端部にはナデにより鈍い面を作り出し、体部は指による整形後、ナデ調整している。

ＳＫ－２出土土器

４の縄文土器の深鉢が出土している。小片のため、図は不正確な点もあるが、口縁部は斜め上方に立ち上がり、端部は丸く収める。口縁端部から下がった位置に小Ｄ字形の刻み目を施した突帯が１条貼り付けられる。内外面ともナデ調整である。胎土に多くの長石と少量のクサリ礫を含む点や、色調がにぶい褐色を呈する等、包含層２出土土器に類似する。



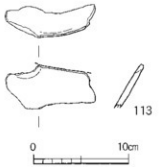
第23図　0区遺構内出土土器

SK－3出土土器

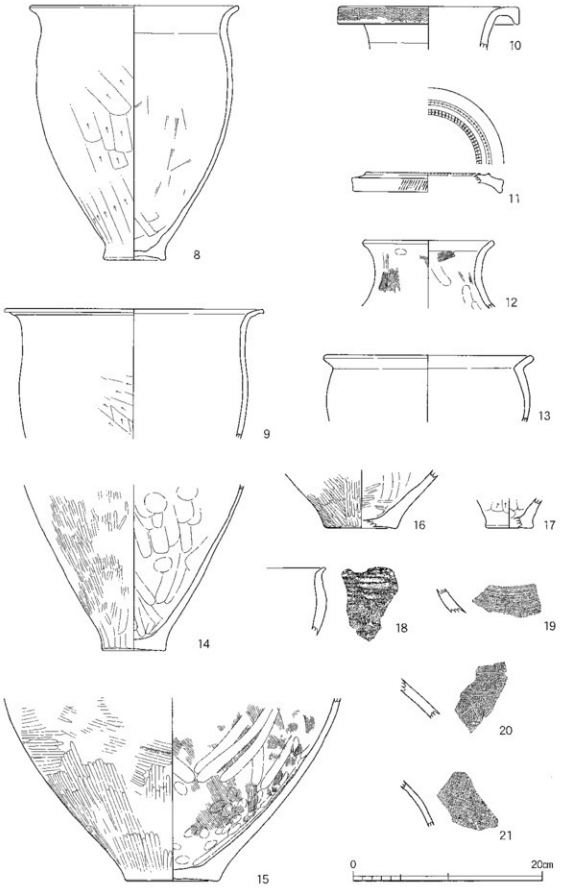
5の弥生土器甕と6・7の弥生土器壺の口縁部が出土している。5は口縁部が体部から強く屈曲して開き、端部は肥厚して、外面は凹面となる。調整は外面の上半が縦方向のハケ調整、下半が縦方向の篦ケズリ、内面はハケ調整後にナデ調整している。口縁部はヨコナデ調整する。体部の外面に煤の付着がみられる。6は口縁部を下方に折り曲げて拡張した広口壺の口縁部である。最頂部は口縁の屈曲部にあり、その面に摩滅が認められる。口縁部は端部に3条の凹線文が施され、内面にも櫛による刺突文が2段に施される。頸部には3条の突帯が貼り付けられているが、突帯は低く、形状も崩れている。突帯下部の体部上端には櫛描波状文が僅かに残る。7は口縁端部を下方に拡張した大型の広口壺である。口縁端面に櫛描波状文が僅かに遺存する。口縁部内面には櫛描の列点文が施される。

SD－1出土土器

縄文土器113・124と8～21の弥生土器の甕・壺・鉢が出土している。113・124は黒色研磨系の浅鉢で、ともに色調は黒灰色を呈す。113は残存する口縁の左端が急激に立ち上がり、その部分の外面が円弧状に膨らんでおり、この部分に突起が貼り付けられていたものと思われる。また、口縁が立ち上がる部分には体部に屈曲が認められ、器形は円形にならないものと思われる。胎土には長石を多く含み、内外面の調整はナデである。ナデの下には条痕が確認できる。全体にやや摩滅している。124はくの字状に屈曲する浅鉢で、屈曲



第24図　0区SD－1縄文土器



第25図　0区ＳＤ－１出土土器

部上には篦描沈線が施される。内外面ともナデ調整。

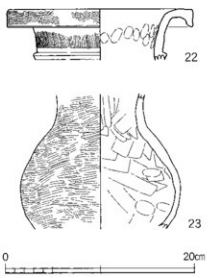
甕は8・9の2個体の他、18の口縁部片と14・17の底部片も甕になるものと思われる。8・9は紀伊型甕で、体部のヨコナデと篦ケズリの間に稜はもたない。8は直接接合できないものの、同一個体と見られる破片を図上で復元したものである。底部は上げ底となり、口縁部は体部から立ち上がり気味に緩く外反して開き、端部は丸く収めている。外面は篦ケズリ後に体部上位から口縁部をナデ調整する。内面はナデ調整。9は体部の張りは弱く、口縁部は体部から緩く外反して水平方向に開き、端部は僅かに面をもつ。8と同様に体部外面は篦ケズリ後に体部上位から口縁部をナデ調整する。17の底部も外面篦削り、内面ナデする。8・9・14・17は胎土に結晶片岩を含んでおり、紀伊からの搬入品である可能性が高い。14は甕の体部下半から底部にかけての破片であり、外面は篦ミガキしている。18は小型の甕で、口縁部は短く、端部は尖るように収めている。口縁部下の体部上半には4条の凹線状に文様が施される。

壺は10～12の3個体の他、15・16の底部と19～21の体部片が出土している。10は口縁部が頸部から大きく屈曲して開き、上端がほぼ水平となる広口壺である。口縁端部は下方に拡張し、端面には櫛描波状文を施している。頸部外面はハケ調整後にナデ調整し、内面もハケ調整後にナデ調整する。頸部下端に突帯貼り付け時のものと思われるヨコナデが確認される。SR－1出土の広口壺22と口径・胎土・色調・焼成・調整等が極似しており、同一個体である可能性が極めて高い。11は小片であり、口径については不確かな点もあるが、小型の広口壺の口縁部片である。口縁端部は上下に肥厚し、端面は凹面となって篦描きの刻み目文を施す。口縁内面の上端には刻み目を施した2条の突帯が貼り付けられる。12は口縁部を拡張しない広口壺である。口縁部は頸部から外反し、端部は面をもつ。器表面の遺存状況が悪いため、調整ははっきりしないが、ハケ調整痕が残る。16は壺底部と思われるもので、外面は篦ミガキ、内面はナデである。19～21は壺体部片である。19は壺体部の頸部に近い部位の破片である。2帯の櫛描直線文が施される。20は肩部から体部中位にかけての破片で、2帯の櫛描直線文の下に斜格子文が施される。21は体部中位の破片で、1帯の櫛描直線文と櫛描波状文が施される。

鉢は13の1個体のみが出土している。体部は肩部が張り、口縁部は体部から屈曲して短く開く。端部は丸く納められている。全体に摩滅しており、調整ははっきりしない。体部の内面はナデ調整か。

SR－1出土土器

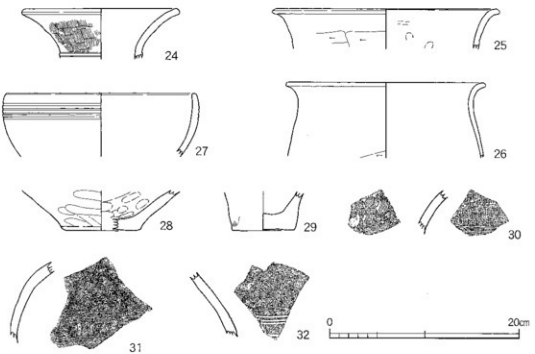
22・23の弥生土器壺2個体が出土している。22はSD－1出土の広口壺10と同一個体とみられる口縁部であり、重なる部分の記述は割愛する。頸部には1条の突帯が貼り付けられ、頸部のハケ調整が10より強く残っている。23は底部を欠く壺体部で、肩部は張らず、最大径は体部の中位より下がった位置にある。また体部から頸部へなだらかに移行する。外面は細かな篦ミガキ、内面はナデ調整である。色調は褐色であり、胎土に石英粒を多く混ぜ込んでいる等、包含層2出土の土器群に近い特徴を持つ。



第26図　0区SR－1出土土器

SR－2出土土器

24～32の弥生土器壺・甕・鉢が出土している。壺は24の他、28・30～32の破片が出土している。24は広口壺で、口縁部が外方に直線的に開き、頸部にはハケ調整によって削り出されたような低い削出突帯が施される。その部分で割



第27図　0区ＳＲ－２出土土器

れているためはっきりしないとはしないが、突帯上には篦描沈線が僅かに遺存している。頸部の外面はハケ調整後にナデ調整し、内面はナデ調整している。胎土にクサリ礫を含み、色調は灰白色を呈す。28は底部片であるが、体部の立ち上がりや調整から壺底部と思われる。外面は篦ミガキ、内面はナデ調整している。胎土や色調からみて生駒西麓からの搬入品であろう。30は広口壷の口縁部片で、外面に櫛描直線文、内面に稚雑な櫛描扇状文が施されている。31は広口壷の頸部片で外面に浅く櫛描直線文が２帯に施される。胎土組成は紀ノ川北岸域に類似する。32は壺の最大胴径付近の体部片で、外面は篦磨きし、篦描直線文を２帯に施し、その間に篦描きの１本線で山形文を施している。

甕は25・26の２個体が出土しており、29の底部も甕になるものと思われる。25は外上方に開く頸部から口縁部が短く外反して開き、口縁端部は丸く納められる。外面は横方向の篦ケズリであり、篦ケズリは頸部にまで及ぶ。口縁部下は篦ケズリ後にナデ調整される。胎土・色調は包含層２出土の土器に近い。26は紀伊型甕であり、体部がやや張り、口縁部は湾曲して開く。口縁端部は小さな面をなす。体部外面は篦ケズリ後にナデ調整している。胎土に結晶片岩が含まれており、紀伊産である。

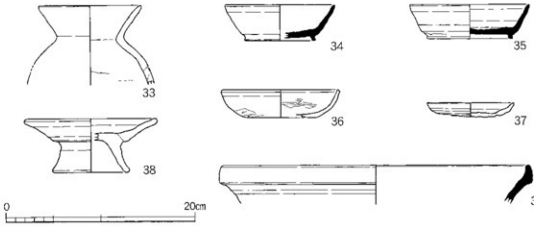
鉢は27の１個体が出土している。27は体部から口縁部にかけて内湾し、口縁端部は丸く納められる。口縁部下に４条の篦描き沈線文が施される。体部外面は篦ミガキ、内面はナデ調整。

包含層出土土器

包含層出土土器として扱った土器類は、遺構検出時までの床土及び遺構面上から出土した土器類と、遺構面下の土壌化した層から出土した土器類である。

33～39は遺構検出時までに出土した土器類である。33は土師器壷の体部中位から口縁部にかけての破片である。全体に磨滅している。

34・35は須恵器杯Ｂである。底部は篦切り後にナデ調整し、高台は底部外周囲に貼り付けられる。34



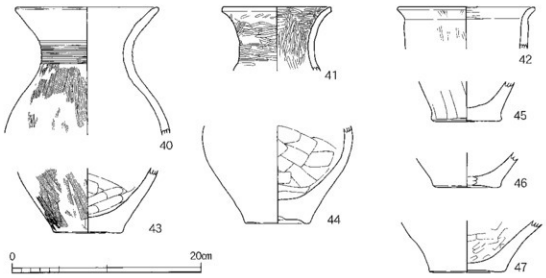
第28図　0区包含層出土土器1

の底部内面は仕上げナデが施されている。34の法量は口径11.4cm・器高3.8cm、35の法量は口径12.5cm・器高3.6cmを測る。36は土師器杯Aである。体部は内弯してそのまま口縁部となり、口縁端部は外頬する面をもつ。全体に磨滅しており、調整等ははっきりしないが、底部外面は篦ケズリ、口縁部内面には篦ミガキの痕跡が残る。法量は口径12.1cm・器高3.0cmを測る。

37～39は中世に属する土器類である。37は土師器小皿で、底部は回転糸切り、底部周囲は回転ナデによる凹凸が激しい。38は土師器の足高高台皿である。外下方に開く台部に皿部を乗せており、皿の口縁は僅かに外反する。全体の器高は13.6cm、台部は高さ3.3cm、皿部の口径は13.6cmを測る。全体を回転ナデで仕上げており、皿部の底には糸切りの痕跡が残る。39は東播系の須恵器鉢である。口縁端部は上方に拡張され、端部内面は内側に突出気味となる。

40～47は第7図東西断面の第19層から出土した土器類である。この層は土壌化しており、土器類も時期的にはまとまったものであることから、遺構の存在が予想されたが、遺構は検出できなかったため、包含層出土として扱った。

弥生土器の壷40・41と甕42の他、壷体部から底部にかけての破片43・44、壷底部片45～47が出土して



第29図　0区包含層出土土器2

いる。

40は広口壺で、口縁部は直線的に開く。頸部に箆描きの帯状沈線が8条施される。体部はハケ調整後にナデ、口縁部はナデ調整で仕上げている。41は小型の広口壺で、口縁部は細い頸部から外反して開き、端部は小さな面をもつ。外面はハケ後に箆ミガキ、内面も箆ミガキしている。42は短い口縁部が斜め上方に開く。口縁部から体部外面と口縁部内面にハケ調整痕が遺存する。体部内面はナデ調整である。43・44は壺の底部から体部にかけての破片である。底部は中央が僅かに窪んで上げ底状となる。外面はハケ後にナデ調整、内面はナデ調整である。色調・胎土が40に類似しており、同一個体の可能性がある。44は底部から体部最大径部にかけての破片で、底部は上げ底となる。内外面ともナデ調整。45～47は壺の底部で、45平底で外面は縦方向にナデ調整している。46・47は底部中央がやや窪んで上げ底状となり、46の外面はハケ後に箆ミガキ調整の痕跡が残る。

40・41・43・44・45は色調がにぶい褐色を呈し、胎土に白色の石英粒を多く含んでおり、一群の土器として捉えられるものである。

（2）1・2区出土土器

段丘崖下の沖積低地に当たる調査区であり、1区と2区は水田の畦割りで区別した調査区である。両調査区とも表土下は水田土壌と洪水砂が交互に堆積しており、それ以下は旧流路が入り乱れた状況で土層が堆積する状況であった。遺物は水田土壌等からも出土しているが、ここではその下部の旧流路等から出土した土器を取り上げている。これらの土器は旧流路に伴う堆積層から入り混じって出土したものである。

包含層出土土器

0区と1区の境である段丘崖と、1・2区の沖積層から出土した土器類である。弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・磁器等が出土している。

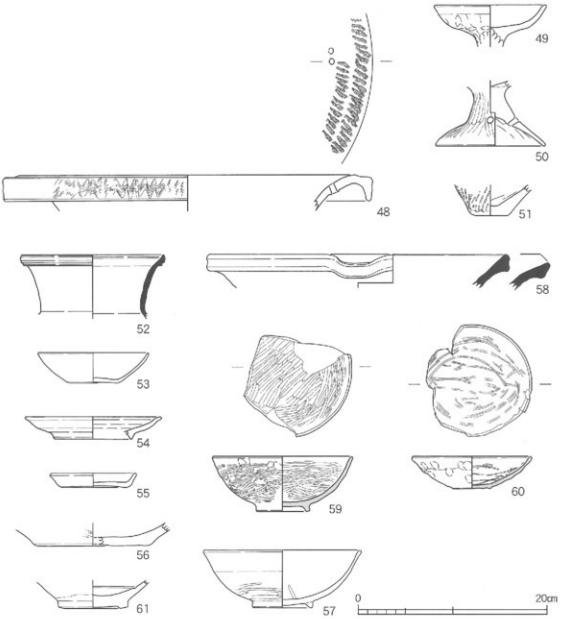
弥生土器には壺がみられる。48は広口壺口縁部である。口縁部内面に2個一対の穿孔がされている。口縁端部は垂下して拡張され、端部内面が僅かに窪む。口縁端面には櫛描波状文が施され、内面には2段に箆による刺突文が施されるが、下段の刺突文は穿孔部で止められており、全体を巡るかは定かでない。

49～51は弥生時代末～古墳時代前期の土器である。49は土師器の小型器台の受け部で、全体をナデ調整で仕上げている。50は高杯の脚部であり、脚柱部は中実で脚裾部は脚柱部から大きく外に広げられ、やや踏ん張る形状である。外面は箆ミガキ、内面はナデ調整する。透孔は4箇所に見られ、調整後に穿孔している。51は土師器甕の小さな底部で、外面には叩き目を残す。

52は古墳時代の須恵器で、広口壺の口縁部である。口縁端部下に突帯を貼り付けている。

53・54は平安時代の土師器で、53土師器杯である。全体に器壁の薄い造りで、底部は回転糸切り後にナデ調整する。54は高台付きの皿で、底部は平高台になるものと思われる。全体に磨滅してはっきりしないが、調整は回転ナデによるものと思われる。

55～61は中世に属する土器類で、土師器・須恵器・瓦器・磁器が出土している。土師器には小皿・椀等があり、55は土師器小皿である。底部は回転糸切りで、口縁部は底部から湾曲して立ち上がる。56は土師質土器の底部である。灰白色あるいはにぶい黄橙色を呈する素地の上に赤色塗装している。外面にハケの痕跡が残る。57は土師器の椀で、底部に輪高台が付く。口縁部下をやや強めにナデているため、体部に僅かな稜をもつ。

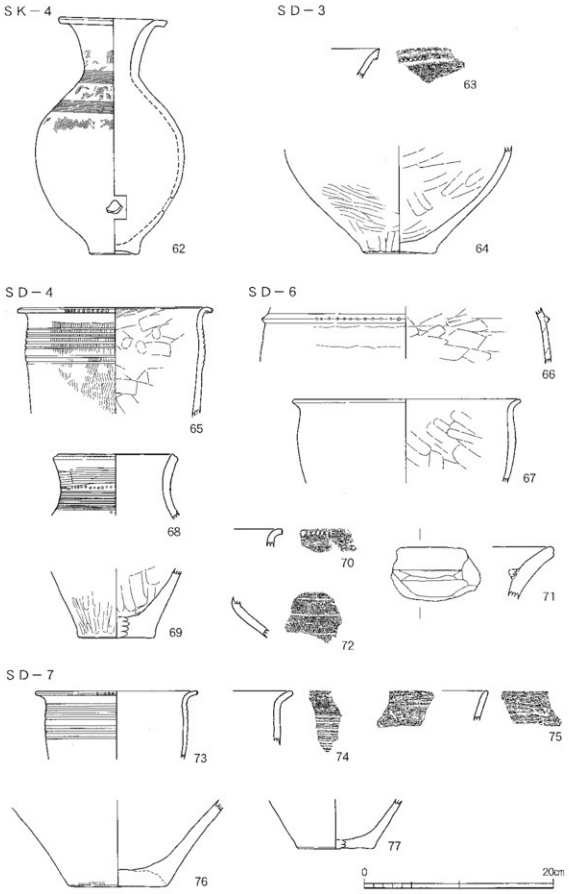


第30図　1・2区包含層出土土器

須恵器は58の東播系の片口鉢が出土している。口縁端部は下方に拡張されて面をもつ。

瓦器は59・60は瓦器椀が出土している。59の高台は外に踏ん張り、断面は方形を呈する。内外面とも丁寧に筐ミガキしている。60は体部の丸みがなくなり、口縁部が直線的となって器形も浅くなり、底部の輪高台は粘土紐を低く貼り付けただけで、高台の名残りを留めるだけとなっている。内面の筐ミガキも粗く、形骸化したものになっている。外面に筐ミガキは認められない。

磁器は横田・森田編年の第Ⅳ類に相当すると思われるものである。61は白磁の椀で、底部は削り出しで露胎、見込み部に圏線を巡らす。



第31図　6区遺構出土土器

（3）6区出土土器

ＳＸ－2出土土器

弥生土器の細頸広口壺62が出土している。小型の壺であるが、ほぼ完形での出土であり、体部下半に焼成後の穿孔がみられる。底部は上げ底であり、体部は張りが弱く、細長い形状を呈する。頸部は細く外上方に伸び、口縁部は頸部から屈曲して水平に近い形で開く。器表の風化が激しく、調整等は不明である。文様もはっきりした状態ではないが、頸部下半から体部中央までの外面に櫛描直線文と櫛描波状文を施している。

ＳＤ－3出土土器

縄文土器と弥生土器が出土している。63は縄文土器の深鉢である。口縁部は外方に開き、端部は尖り、端部には小Ｏ字形の刻みを施す。口縁端部外面には断面が下さがり三角形の突帯が貼り付けられ、突帯には小さいＤ字形の刻み目を施している。外面は条痕後にナデ調整し、内面はナデ調整である。胎土には6㎜大までの砂粒を多く含む。64は弥生土器の壷底部である。平底で、外面は篦ミガキ、内面はナデ調整である。63ほど多くはないが、この土器にも6㎜大の比較的大きな砂粒が含まれる。

ＳＤ－4出土土器

弥生土器の甕が出土している。やや歪になっており、口径や傾きに定かでないところもあるが、体部はほぼ直立に近く、口縁部は体部から水平よりやや下がり気味に屈曲して開く。体部外面はハケ調整、内面はナデ調整する。口縁端部には刻み目が施され、口縁部下の体部上半には７条の篦描き沈線文が施される。体部から口縁部外面に煤が付着する。

ＳＤ－6出土土器

縄文土器と弥生土器が出土している。66は縄文土器の深鉢体部片である。内外面ともナデ調整であり、断面が下さがり三角形の突帯を貼り付ける。突帯の貼り付けは上側がナデにより体部との境が不明瞭であるのに対し、下側は比較的角度も持った状態となっている。突帯上には小Ｄ字形の刻み目が施されているが、遺存状況が悪く、不鮮明である。胎土は細かな砂粒を含んで粗く、粘土の貼り付け痕が明瞭に残る。

67～72は弥生土器である。67は鉢で、肩部の張った体部から外反する口縁部が開く。内外面ともナデ調整である。

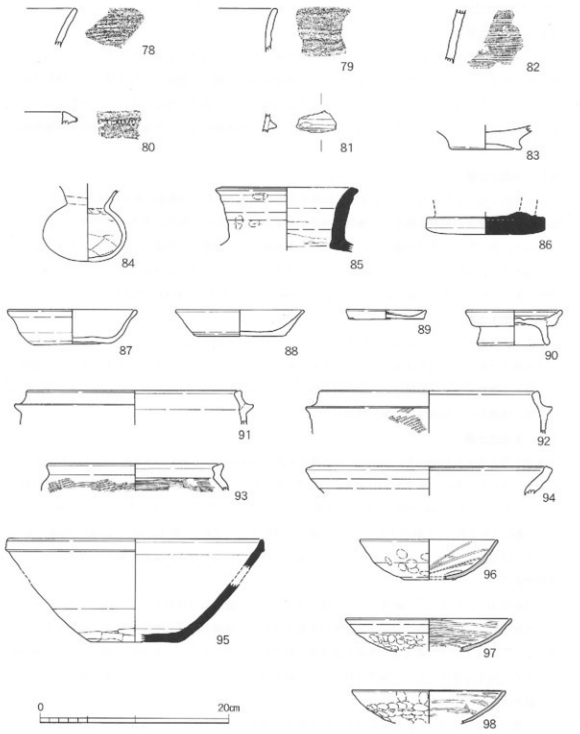
68は短頸壷で、頸部から口縁部にかけて緩く外反する。口縁端部は外傾する面を持ち、面の中央に１条の沈線を施し、その両側に篦による刻み目を施している。頸部外面には櫛描直線文と刺突文を交互に施している。最上段の直線文は刺突文を施文後に施されている。刺突文の平面形は円形もしくは楕円形を呈する。刺突は茎状のもので施文されており、刺突文の中には孔の中央が膨れ、縁が溝状となったものが認められる。

70の甕は口縁部が外反し、端部には刻み目を施す。外面はハケ調整。69の底部は平底で、内面ナデ、外面は箆磨きする。

71・72は小片であるが、壷の口縁部と体部片である。71は内面に突帯を有する大型の広口壺で、口縁端部には篦描沈線文を１条施す。72は体部片で、肩部に間隔の開いた篦描きの直線文を施す。

ＳＤ－7出土土器

縄文土器の深鉢・浅鉢と弥生土器の甕が出土している。深鉢は75・114の２個体が出土している。ともに粗製で、75は縄文土器の深鉢口縁部で内外面に条痕が残る。口縁端部は丸く収められる。114は頸部が屈曲する深鉢で、体部外面は篦ケズリする、器壁は薄く、小型の深鉢になるものと思われる。123は黒色研磨系の浅鉢で、ともに色調は黒灰色を呈す。123は口縁の一部が残り、外面は篦ケズリ後ナデ、



第32図　6区包含層出土土器1

内面はナデ調整である。この他、擬口縁状となった内面に粘土の剥離痕が認められる体部片がある。この体部片は器壁の薄いもので、外面は箆ケズリ後ナデ、内面はナデ調整している。

73・74は弥生土器の甕で、73は体部から屈曲して口縁部は横方向に開く。口縁部には刻目が施され、頸部に箆描沈線文を2帯に施す。74は体部から屈曲して口縁部が斜め上方に立ち上がり、頸部には櫛描直線文を3帯に施す。口縁部は無文である。

76・77は壺の底部で、76は外面に僅かに刷毛調整の痕跡が残る。

包含層出土土器

弥生時代から室町時代までの縄文土器・弥生上器・土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶器・磁気等が出土している。

78・79・116・117は縄文上器の深鉢である。78は内外面に条痕を残すもので、口縁部は斜めに立ち上がり、端部は丸く納める。79はやや外反する口縁で、外面は2段に強いナデを施している。口縁部は端部の一部が肥厚したり、強いナデと口縁部が並行しないことから、波状口縁になる可能性がある。115・116は小片で図化ができなかったものである。115は単純に斜めに開く口縁であり、端部は丸く納める。116は頸部が外反し、口縁部は内湾する。黒灰色を呈し、長石粒が目立つ。

80・81は突帯文の土器である。80は突帯を口縁端部に接して貼り付けた甕と思われる破片で、突帯には刻み目が施される。81は比較的高い突帯を貼り付け、外面にススが付着しているが、小片のため、突帯の貼り付け部位についてははっきりしない。突帯に刻み目は施されていない。

82・83は弥生上器で、82は外面に櫛描直線文が5段に施された弥生土器の壷頸部である。櫛描直線文は3条を単位とする。83は上底の底部で、壷底部と思われる。84～86は古墳時代の土器であり、84は土師器の小型壷、85は須恵器横瓶の口縁、86は須恵器の摺り鉢である。84は口縁端部を欠き、外面の調整は摩滅ではっきりしないが、内面はナデ調整である。85は頸部の内面に同心円の当て具痕が残る。86は底部のみの破片で、外面はナデ調整、内面は指押さえしている。器高は3.7cmを測る。88の口縁部は直線的に開き、口縁部の上半は強いナデによって薄く仕上げられる。

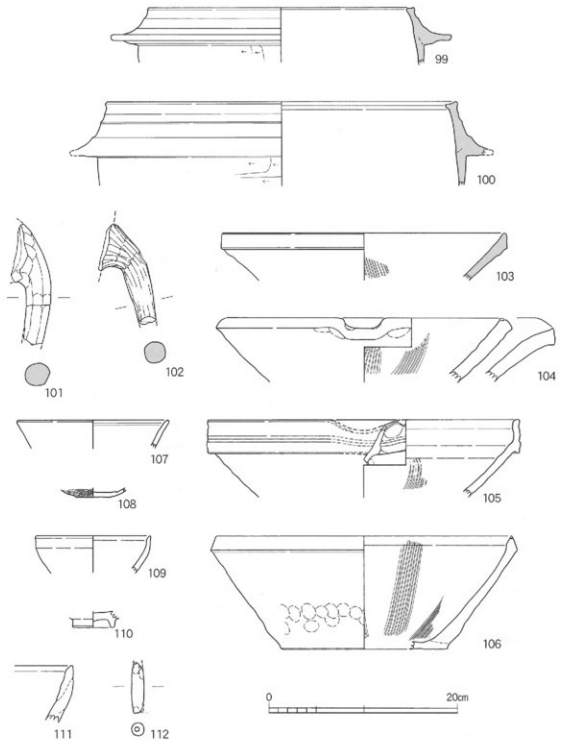
87～90は中世の杯・小皿・台付皿である。87・88は土師器杯Aで、回転ナデで仕上げられたものである。底部は回転糸切りによる切り離しである。内面にススが付着し、全体に熱を受けて赤変している。口径13.4cm・器高2.8cm。89は土師器小皿で、口縁部は短く断面が三角形状を呈す。底部は静止糸切りによる切り離しで、内面には仕上げナデが施される。口径8.25cm・器高1.0cm。90は台付皿で、全体の高さは3.7cm、台部の高さは2.0cm、皿部の口径は9.75cmを測る。

91～94は土師器鍋で、91・92のように鍔が付くもの、93のように口縁部が直立するもの、94のように口縁部は屈曲し、端部が内側に突出するものの3種がみられる。91は体部の上端を外反させて鍔とし、その上部に口縁部を貼り付けたもので、口縁端部は短く外に突出する。92は口縁端部の突出が鈍くなって肥厚する形となる。体部外面には叩き目が残る。93は最大径が体部にあるもので、口縁部は直立して立ち上がり、端部は内側に突出して内傾する面を形成する。体部の外面は叩き、内面は刷毛調整である。94は口縁部のみで全体の形状は不明だが、口縁部は内湾して、端部は内側に肥厚する。92・93の外面にはススが付着し、94は赤変している。

95は東播系の須恵器鉢で、体部は丸みを持ち、口縁部は下方に僅かに拡張される。底部は回転糸切りによる切り離しで、底部周囲は板ナデされる。内面は使用によると思われる摩滅が著しい。

96～98は瓦器椀で、3点とも外面に指押さえ痕を残し、内面は粗くヘラ磨きする。96の体部はまだ椀形を残すが、底部の高台は形骸化し、紐状の粘土を貼り付けるだけとなっている。97・98はともに口径に対して器高の低い器形となっているが、97は外面にナデによる稜を有し、焼成も良いものである。

99～103は瓦質土器で、99・100は羽釜、101・102は羽釜の足、103は鉢である。99・100の羽釜はともに鍔が水平に大きく張り出し、口縁部は強いナデによる稜が2段にみられる。口縁端部はナデによって内外に突出した形状となり、上端は凹面となる。ともに体部の外面をヘラ削りしている。101・102は三足付釜の足で、調整はともにナデである。103は鉢で、口縁部は面を持ち、断面は三角形を呈す。内面は縦方向の刷毛で調整される。



第33図　6区包含層出土土器2

104～106は備前焼あるいは丹波焼と思われる擂鉢で、104は口縁端部を窪切りし、片口部を設けている。内面の擂目は8本単位の櫛描きにより施されている。胎土には石英粒を多く含んでいる。105は備前焼の擂鉢である。胎土は緻密で、チョコレート色を呈し、口縁部は上方に拡張されて、凹線が施されている。遺存する部分はかなり歪んでおり、片口分にあたるものと思われる。内面の擂目は8本単位で櫛描きによるものである。106は体部の下半に指頭圧痕を残し、口縁端部の内面が面を持つようになる

ことから丹波焼と思われるが、色調が丹波焼よりは赤茶色であり、丹波とは断定できないものである。内面の擂目は9本単位の櫛描きによるものである。

107・108は輸入磁器の青磁で、107は椀である。口縁部の内面に圏線を巡らす。108は青磁の皿底部で、底部内面の周囲に圏線を巡らしている。これ以外にも118・120・122の白磁椀、119の青磁椀が出土している。

109は天目椀の口縁部で、110は天目椀の底部である。109の天目椀はやや褐色がかり、胎土は灰白色を呈する。110の底部は内面にのみに厚く施釉され、外面は露胎である。この他、天目椀は109と同一個体の可能性がある口縁部片が出土している。

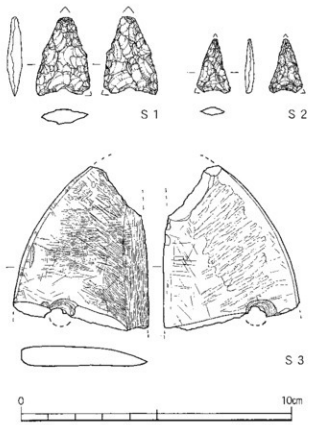
111は製塩土器である。厚い器壁で、碗弾形になるものと思われる。内外面ともナデ調整である。

112は土錘である。長さ5.4cm・径1.3cmの細長いものである。

3．石製品

打製の石鏃2点と磨製の石包丁が出土している。S1・2は抉りの浅い凹基式で、ともに基部の一部と先端を欠く。S1は長さ2.9cm・幅2.0cm・重さ2.4gを測る。S2は基部が細く、長さが長いもので、長さ2.0cm・幅12.8cm・重さ0.5gを測る。稜には水によると思われる摩滅がみられる。S1・2ともサヌカイト製である。

S3は直線刃半月形の磨製石包丁で、残存長6.08cm・幅5.0cmを測る。刃部は鋭く尖り、体部と刃部の境は明確な稜を持たない。背縁部は角を取って丸く仕上げられている。研磨が丁寧に行われているためか、表裏とも全体に黒光りするほど滑らかな面となっている。表面の研磨は特に丁寧に行われており、刃部は刃と並行して横方向に、背縁部は斜め方向に研磨されている。体部の研磨は全面に行われ、一定の単位で方向を変え、2回以上の研磨が行われており、さらにその上に研磨を重ねている部分も認められる。体部の研磨と刃部の研磨は一部に体部の研磨が先行する部分があるが、基本的には刃部の研磨が先行する。裏面は体部の中央が磨き残され、刃部と背縁部のみが研磨される。刃部の幅は表面より狭くなっている。紐孔の穿孔は2方向から行われ、孔側面には回転による擦痕が認められる。孔の縁は表面では全体に磨滅がみられ、裏面でも全体に摩滅が認められるが、背縁側がより



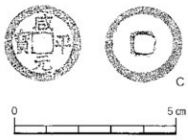
第34図　石器

摩滅している。表面の紐孔と背縁部との間隔は1.4cm、裏面の紐孔と背縁部の間隔は0.8cmであり、紐孔は体部に対して65°の角度で穿たれている。表面の紐孔の背縁側には穿孔途中で放棄した小孔が認められ、この孔側面にも回転による擦痕が認められる。石材は黒色泥岩と思われる。

4．金属製品

銅銭

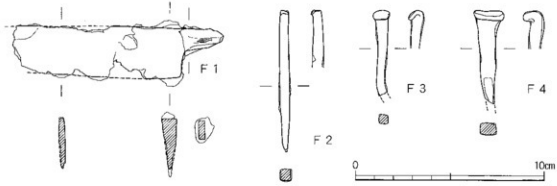
北宋の「咸平元寶」が出土している。比較的遺存状況が良く、表面の文字ははっきり読み取れ、潰れている部分はない。裏面は無文である。径2.43cm・厚さ1.3mm・重3.1gを測る。「咸平元寶」は北宋の咸平元年（998年）初鋳の銅銭で、周囲の縁の幅が広いものや、出所の不明な銅銭の中にも存在するようであるが、今回出土したものは径や字体も整っており、北宋銭とみてよいものと思われる。



第35図　銅銭

鉄製品

鉄製品は刀子や釘を中心に出土しており、その内の4点を図化し、掲載した。F 1はP22から出土したものである。錆化が激しく、遺存状況も悪いためはっきりしない点が多いが、残存長11.05cm、身部長9.0cm、茎長2.05cmを測る。身部の断面が三角形となることから刃器と思われ、茎が短いことから刀子と考えているが、身部幅3.5cm、背幅0.8cmを測り、小刀の可能性もある。茎には木質痕が残る。F 2～4は包含層から出土した、断面が方形の釘である。F 2はほぼ完形で、長さ7.35cm、太さは最も太い部分で0.7cmを測る。頭の潰れは小さく、先端は尖る。F 3は頭部で、先端は欠く。頭の潰れは大きく、残存する先端部は曲がっている。頭部が最も太く、0.85cmを測る。F 4は頭部が折り曲げられた釘で、断面は長方形をとなる。頭部は1.5×1.1cmの大きさであり、軸部の太さは0.85×0.65cmを測る。



第36図　鉄製品

第3章 自然科学的分析

第1節 下加茂遺跡における樹種同定

株式会社古環境研究所

1．はじめに

6区から検出されたＳＤ－３の底には木材が残されていた。木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。また、木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能である。遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなることから、樹種の同定を行った。

2．試料

試料は、下加茂遺跡の６区ＳＤ－３より出土した木材２点である。

3．方法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4．結果

表１に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

カヤ　*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.　イチイ科　（図版１・２）

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で１分野に１～４個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が存在し２本対になる傾向を示す。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、仮道管の内壁には２本対になる傾向を示すらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりカヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の済州島に分布する。常緑の高木で通常高さ25m、径90cmに達する。材は均質緻密で堅硬であり、弾性が強く水湿にも耐え、保存性が高い。弓などに用いられる。

5．所見

同定の結果、下加茂遺跡の木材はカヤ２点であった。カヤは、主に温帯下部の暖温帯に分布し、谷沿いなどやや湿潤なところに生育する常緑高木である。堅硬で弾性が強く保存性が高い材である。遺跡周辺に生育していたか、地域的な流通の範囲で得られる樹種と推定される。

参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

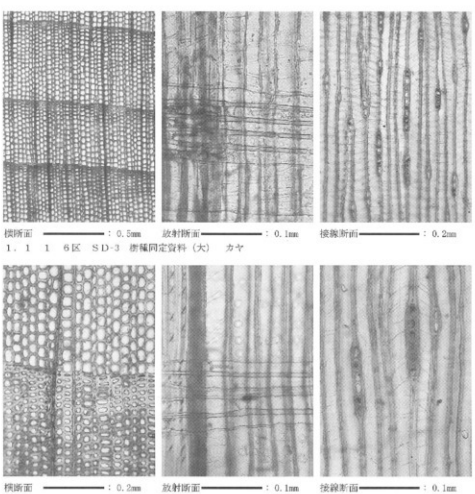
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．雄山閣，p.296

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成．植生史研究特別第１号，植生史研究会，p.242

表１　下加茂遺跡Ⅱにおける樹種同定結果

No.	ネーミング	地区	遺構	備　考	結果（学名／和名）
1	1	6区	ＳＤ-3	樹種同定資料（大）	*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.　カヤ
2	1	6区	ＳＤ-3	樹種同定資料（小）	*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.　カヤ



下加茂遺跡Ⅱの木材（縮尺率：80%）

第2節　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
伊藤茂・丹生越子・廣田正史・瀬谷薫・小林紘一
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎

1．はじめに

段丘下の沖積地は水田土壌下に自然流路が入り乱れる土層の堆積状態がみられた。そこで、こうした土層堆積の年代を知る手がかりを得るため、出土した木片について（第6図★印）、放射性炭素年代の測定を行った。検出された試料については、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

試料の調製は廣田、瀬谷、Lomtatidze、Jorjoliani、測定は伊藤、丹生、小林が行い、報告文は伊藤、中村が作成した。

2．試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。

試料は未炭化の木材（生材）であり、最外年輪を含む5年輪を測定用に採取した。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

表1　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-11269	遺跡名：下加茂遺跡Ⅱ	試料の種類：生材 試料の性状：最外年輪（5年輪分） 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1 N，塩酸：1.2N） サルフィックス

3．結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（$\pm 1\sigma$）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.0（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表2　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-11269	−27.70±0.24	4139±28	4140±30	2863BC (14.2%) 2833BC 2819BC (5.1%) 2807BC 2759BC (19.7%) 2716BC 2709BC (22.8%) 2661BC 2650BC (6.5%) 2634BC	2873BC (95.4%) 2622BC

4．考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正をいった。2σ暦年代範囲（95.4%の確率でこの範囲に暦年代が収まることを意味する）に着目すると、暦年代範囲は2873-2622calBC（95.4%）であった。この結果は、小林謙一による推定値（小林，2008）に照らすと、縄文時代中期後葉に相当する。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

小林謙一（2008）縄文時代の暦年代．縄文時代の考古学2―歴史のものさし，257-269.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代．3-20.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

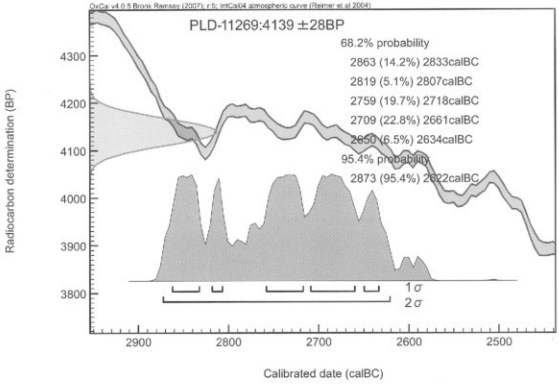

OxCal v4.0.5 Bronk Ramsey (2007); r:5; IntCal04 atmospheric curve (Reimer et al 2004)
PLD-11269:4139 ±28BP
68.2% probability
2863 (14.2%) 2833calBC
2819 (5.1%) 2807calBC
2759 (19.7%) 2718calBC
2709 (22.8%) 2661calBC
2650 (6.5%) 2634calBC
95.4% probability
2873 (95.4%) 2622calBC
1σ
2σ
Radiocarbon determination (BP)
4300
4200
4100
4000
3900
3800
2900
2800
2700
2600
2500
Calibrated date (calBC)

図1　暦年較正結果

第4章　まとめ

第1節　遺物

1．概観

今回出土した遺物は土器類がコンテナに14箱、石器3点、銅銭1枚、鉄製品10点であり、他にサヌカイト片が比較的多く出土している。出土した土器類には縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・磁器・陶器等の多種に及び、時期的にも弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代・鎌倉時代、室町時代と多期に渡る。量的に多いのは弥生時代・平安時代～鎌倉時代・室町時代の3期であり、調査区において遺構が検出される時期と符合している。

しかし、出土した土器類は破片が多く、完全な形に復元できるものは数点に留まっている。また、土器類には遺構内から一括性を有して出土したものはなく、溝や流路内に堆積した土層内に含まれる形で出土したり、包含層内から出土したものばかりである。このため、縄文晩期の土器ともに弥生土器が出土しているものの、共伴関係等を明らかにできる資料はない。このような土器の出土状況ではあるが、0区包含層2として扱った土器群は、局所的に土壌化した上層内から出土したものであり、何らかの遺構内に伴っていた可能性のあるもので、比較的一括性の高いものと考えている。

ここでは遺構の時期を決定するため、遺構内から出土した土器を中心に検討する。

2．弥生時代の土器

縄文土器

深鉢・浅鉢が0区SK－2・SD－1、6区SD－3・4・6・7及び6区の包含層から出土している。深鉢は4・25・63・66・75・78・79・113・115・116の10点を掲載しているが、他に体部片9点が出土している。

深鉢の口縁には①単純に外反し端部を丸く収める75・78・115、②頸部が屈曲し口縁部が内湾する116、③波状口縁となる79、④刻み目突帯を施した4・63・66がある。

①は75・78のように内外面に2枚貝条痕を残すものと、115のようにナデ調整のみで仕上げるものが存在する。②の116は胎土に長石粒を多く含み、色調も浅緑121と極めて類似する。

④は突帯文土器であり、突帯の貼り付け位置は口縁から下がった位置の4と、口縁端部に貼り付ける63が存在している。突帯の断面は4が小さな三角形を呈し、63は下さがり三角形となっている。また4は突帯の上下をナデており、63は突帯上側と口縁部内面を同時にナデている。そのため63の口縁端部は鋭く尖った形状となっている。刻み目はともに軽く浅いものであり、突帯上にはともに小D字形の、63の口縁端部は小O字形の刻み目が施されている。この他、66は2段突帯の深鉢体部片であり、体部と頸部の境に、断面が下さがりの三角形となる突帯が貼り付けられる。突帯上の刻み目はやはり小D字形の軽く浅いものである。内面に屈曲はみられない。この他、突帯を有しないが、113も突帯文土器の体部から頸部にかけての破片であろう。屈曲部が段状となり体部は箆ケズリであることから、口縁部に突帯を貼り付けた1条突帯の深鉢になるものと思われる。また、体部と口縁部境が屈曲するが突帯はなく、

体部外面を篦ケズリする深鉢の体部片も出土している。これは1条突帯の深鉢になるものであろう。

浅鉢には113・117・123・124の4個体が出土しており、いずれも黒色研磨系の土器である。117・124は口縁部の屈曲する浅鉢であり、117はくの字口縁となるものであり、124は口縁部下端の屈曲部上側に沈線文を施している。113は波状口縁の浅鉢であり、体部内面が縦方向に僅かに屈曲しており、体部は円形にならない可能性がある。4個体とも器壁を極めて薄く仕上げており、123は篦ケズリ後にナデ調整、波状口縁の113は条痕後にナデ調整している。口縁部に突帯をもつものは存在していない。

これらの縄文土器は、包含層から出土した78・79と弥生期の流路を切り込んだ土壙から出土した4を除けば、弥生時代前期末から中期前半にかけての弥生土器を出土する流路や溝内から出土したものである。したがって、これらの縄文土器は弥生土器と同時存在する可能性の高い縄文晩期の土器と言える。

淡路における縄文晩期後半の土器は淡路市富島遺跡B地区黒褐色砂層出土土器、同じくA・C・D・E地区包含層等出土土器、淡路市佃遺跡包含層出土土器、砂川南遺跡包含層出土土器、給田遺跡包含層出土土器、洲本市武山遺跡竪穴状遺構出土土器、安手間所第4トレンチ出土土器等がある。しかし、いずれも断片的なもので、全容を窺える資料もないのが現状である。また包含層からの出土品であり、一括して論じるには躊躇する資料である。したがって、編年的な順序立ては困難な状況であるが、富島遺跡出土資料には弥生土器を伴わず、口縁外面に条痕を残す「く」の字に外屈する深鉢と突帯文の深鉢が存在している。佃遺跡では突帯文土器のみが報告され、弥生土器は伴わず、口縁端部が厚くて方形に近く、突帯も断面三角形のものが多いが、断面下さがり三角形で、刻みの浅い突帯が存在している。武山遺跡では口縁端部の下方に断面下さがりの三角形の突帯が貼り付けられ、刻みは小さいD字形のものが多い。こうした各遺跡出土の突帯文土器と比較すると、最も新しくなる傾向がみられる。さて本遺跡出土の縄文土器の編年的位置づけであるが、④の突帯文土器は63のように、口縁部が外反し、口縁端部に刻み目を施す等、口酒井・船橋式と共通した点もみられるが、刻み目は小さく浅いものに変化している。本遺跡から東1.4kmの武山遺跡から出土した突帯文土器は、小片で判断しにくいものが多いが、口縁部は外反するものが多く見受けられ、口縁端部に刻み目を施すものも存在している。また同じ洲本市の安乎間所遺跡でも突帯文土器が山土しており、口縁端部に刻みを施すものが存在している。長原式やその後の可能性が言われる水走遺跡出土土器には口縁端部に刻み目を施すものは存在しないとのことであり、本遺跡出土の突帯文とは様相を異にしている。一方、紀伊形甕が船橋式の系譜上に捉えられ、近畿南部には長原式期にも船橋系が残留するとのことであり、淡路もこうした近畿南部と動向を同じくしている可能性もある。

弥生土器

0区SD－1・SR－1・SR－2、6区SX－2・SD－3・SD－4・SD－6・SD－7及び0区・6区の包含層から出土している。全容が窺えるものは62の壷のみであり、それ以外は口縁部の形状や文様等から器形を判断するしかないが、壷26個体、甕14個体、鉢3固体・蓋1個体が出土している。高杯はみあたらない。

弥生時代中期前半までの土器

出土した弥生土器の中で占める割合は高いが、量的には多量とはいえず、全容が窺い知れるものは少ない。壷は12個体が出土し、広口壷と短頸壷の2種が存在する。甕は11個体あり、如意形口縁甕・紀伊形甕・逆L口縁甕の3種と外反口縁甕の4種がみられる。鉢・蓋はそれぞれ1個体が出土している。

壷　広口壷と短頸壷がある。広口壷は口縁部片が24・40・41・71の4個体ある他、23・31・32・43・44・64・72・82の頸体部片8個体が存在する。口縁端部を丸く収めるか小さな面をもたせており、71は

端面に1条の沈線が施される。頸部は比較的短いものばかりで、24では削出突帯第Ⅱ種が施される。ただその部分で欠損しているため、突帯上の沈線数は不明である。40では箆描沈線が8条施され、41は無文である。この他、破片の中には、頸部が外反しながら伸びる甕形も存在しており、31では外面に2帯以上の櫛描直線文が、82では4帯以上の櫛描直線文が狭い間隔で施される。頸体部の境はそれほど明瞭ではなく、40では頸部から体部になだらかに移行する。体部の形状ははっきりしないが、23の体部片は最大胴が下がった位置にあり、底部に向かって急激に窄まるようである。40・41は、それぞれ43・44と同一個体と思われるもので、体部がそれほど張らず丈高の器形になるものと思われる。底部は44のように周囲を高くして明確な上げ底とするものも存在するが、僅かに上げ底とするものが多い。調整は外面を鏡ミガキする23・31・41・82と刷毛調整の24・40、ナデ調整の71の3技法が存在している。

体部文様では、間隔の開いた箆描沈線文（72）、胴部最大径付近を箆描沈線で区画し山形文（32）を施すものがみられる。

短頸壷　68の1個体のみである。口縁端部に箆描沈線と刻み目、頸部外面に櫛描直線文と刺突文施す。体部は欠くが、頸体部の境はなだらかになるものと思われる。

甕　如意形口縁が18・42・65・73・74の5個体、逆L字形口縁が80の1個体、外反する口縁の紀伊形甕は8・9・26と17の底部の4個体、紀伊形であるが胎土が紀伊とは異なる甕が1個体（25）ある。

如意形口縁甕5個体には、口縁端部に刻み目、体部に多条化した箆描沈線文を施す65・73、口縁部は無文で、体部に櫛描直線文を施す74、口縁部・体部とも無文の42があり、他に口縁部無文で、体部に棒状のもので凹線状とした18がみられる。65・73の箆描沈線は多条化し、74の櫛描直線文は幅広く施される。

紀伊形甕は上記の4個体と、他に底部1個体が出土している。いずれも胎土に結晶片岩を含み、紀伊からの搬入品である。口縁から肩部の判明する4個体では、肩部は稜をなさず、肩部から上はケズリ後にナデ調整されている。口縁部は頸部から外反するが、9のように口縁部が伸び、外面にナデによる段をなすものもみられる。口端部は小さな面をなす9・26と、面をなさない8がある。8は図上で復元したものであり、正確ではないきらいがあるが、8・26の体部はやや張り、9の体部は体部と肩部の境に最大胴径がある。

25は形態・調整とも紀伊形甕と共通するが、胎土は異なり、地元の胎土を使用している。色調も紀伊産とは異なっている。紀伊形甕を模倣して、和泉もしくは淡路で生み出されたものと思われるものである。

逆L字形口縁の甕は80の1個体のみである。口縁端部外側に下さがり二角形の刻み目突帯を貼り付け、体部以下は欠いているが、所謂瀬戸内甕である。

鉢・蓋　ともに1個体のみが出土しており、67は紀伊形甕に近いナデ調整であるが、胎土は異なっている。蓋は小型品で甕の蓋になるものとの覆われる。

編年的位置づけ　淡路島における弥生土器の編年は確立しておらず、弥生土器近畿編においても淡路地方のみが記載されていない状態にある。したがって今回出土した土器類、なかでも弥生時代中期前半までの土器の編年的な位置づけ十分に行い得ない状況であるが、ここでは淡路における中期前半までの土器を概観し、今回出土した土器類の編年的位置づけを行いたい。

まず、淡路において中期前半までの土器を出土する遺跡としては、本遺跡の他、洲本市武山遺跡・安乎間所遺跡・下内膳遺跡、南あわじ市志知川沖田南遺跡・嫁ヶ淵遺跡等が挙げられる。

この内、武山遺跡と志知川沖田南遺跡では頸体部境を段とする広口壷が出土している。武山遺跡出土

の広口壷は口頸部境に2条の箆描沈線文、頸体部境の段の下側には連弧文を施文する。体部は強く張り、所謂遠賀川系の壷である。甕は明確ではないが、如意形口縁で口縁端部に刻み目、体部に3条の箆描直線文を施す小片がある。志知川沖田南遺跡出土例は壷棺と使用されていた大型の広口壷で、口縁部を欠いているが、頸体部境に段をなしている。大型で、丈高の器形であり、所謂遠賀川系のB形態の壷である。志知川沖田南遺跡でも甕を伴っていないが、やや離れた地点から、如意形口縁で、口縁端部に刻み目を施し、体部は無文の甕が出土している。

これら両遺跡に続くのが洲本市安乎間所遺跡の清内から出土した土器類である。土器類の器種は広口壷・無頸壷・甕・蓋で構成されており、広口壷は遠賀川系の広口壷であるが、口縁部が大きく開いて、頸部には4条の箆描直線文を施している。未公表の広口壷の中には頸体境に削出突帯Ⅱ種を施し、突帯上に6条前後の箆描直線文を施すものが多く見受けられる。無頸壷は口縁部下に貼付け突帯、頸体部境に刷り出し突帯Ⅱ種を施し、やはり突帯上には6条の箆描直線文を施している。甕は如意形口縁のものがほとんどのようであるが、逆L口縁甕や口縁下に刻みのない突帯を施した甕が存在している。甕頸部の箆描直線文は2～4条で、多条化したものは存在していない。

南あわじ市嫁ヶ淵遺跡出土の土器類は流路内に投棄されたもので、ほぼ甕類のみで構成され、壷は1個体がみられる程度である。その壷は遠賀川系の形態は失っており、頸が直立気味になるなど中期的様相を示す。多数を占める甕類は如意形口縁甕、逆L字形口縁甕、紀伊形甕の3タイプの甕で構成される。それぞれの甕の占める比率については判明していないが、紀伊形甕の占める割合も搬入品とは思えないほどの比率を占めているように見受けられる。甕の口縁部下の箆描直線文は多条化し、沈線の間隔が開いたもの、半裁竹管による施文のものもみられる。

口縁部下に多条の箆描直線文を施した甕は洲本市下内膳遺跡でも出土している。逆L字形口縁下に多条の沈線が施されている。

以上の4遺跡出土の土器類は武山遺跡・志知川沖田南遺跡出土の土器類は段を有することから弥生時代前期様相1～様相2、安乎間所遺跡出土の土器類には壷が削出突帯Ⅱ種、甕の箆描沈線が4条以下であることから前期様相2～3に、嫁ヶ淵遺跡や下内膳遺跡出土の土器類は壷は頸部が伸び遠賀川系の形態を消失し、甕類に逆L字口縁甕や紀伊形甕の存在、箆描直線文の多条化、櫛描文の盛行が見られないこと等から中期前半様相1に位置付けができる。

さて、本遺跡出土の中期前半までの土器類であるが、壷類では24・30～32・40・41・43・44・64・68・71・72が相当する。この内、口頸部の形状がわかる広口壷は24・40・41である。24は頸部に削出突帯Ⅱ種が施されているが、安乎間所遺跡の広口壷や無頸壷と比較すると突帯の出し方がヘケで押さえた形に変わっており、突帯上の直線文も浅い上に細く、楕あるいはヘケ状の工具によって施されている。40・41の小型の広口壷は頸部が伸び、40の箆描直線文も帯状となっている。無頸壷68の直線文は櫛描である。甕では多条化した箆描直線文は見られないが、直線文の間隔が開いたものや2段に施されるもの、櫛描直線文が施されたものが存在している。また紀伊形甕が存在していることなどから、一部遡る可能性のあるものが含まれるが、中期前半の様相1～2に位置づけしておく。

弥生時代中期中半～後半の土器

6区の方形周溝墓ＳＸ－2出土の62、0区ＳＫ－3出土の5～7、ＳＤ－1出土の10～14・19～21、ＳＲ－1出土の22、ＳＲ－2出土の27・30、1区包含層出土の48が相当する。

器種では壷・甕・鉢があり、高杯は欠落している。壷では広口壷・細頸広口壷・直口壷がみられ、広口壷では①口縁端部を肥厚する程度に拡張する11、②口縁部は外反し端部を真下に拡張する7・48、③

口縁部が頸部から屈曲して水平方向に開き端部を真下に拡張する10・22、④口縁部を斜め下方に拡張した6が存在する。

①の11は肥厚させた口縁端部に箆描きの斜線文を施し、口縁内面には刻み目を施文した突帯2条を貼り付けている。播磨地方の影響が考えられ、Ⅲ様式の中でも古段階（今里編年中期Ⅲ・篠宮編年Ⅲ－1）に位置づけられる。

②・③はともに口縁端部を下方に拡張したもので、端面には櫛描波状文を施す。③の2個体は同一個体になるものであるが、22の頸部には突帯が貼り付けられているなど、Ⅲ様式の様相を残しているが、端部の拡張が大きいことや、口縁内面の列点文などからⅣ様式としておく。

④は6の1個体のみであるが、拡張した口縁端面や頸部に凹線を多用しており、②・③同様にⅣ様式に位置づけできる。

細頸広口壷は62の1点だけであるが、全容が窺える唯一の土器である。頸部と体部の境は比較的明瞭となっており、体部は縦長で最大胴位はほぼ中央にある。頸部が斜め上方に立ち上がり、口縁部は頸部から屈曲して横方向に開くなど、和泉・摂津といった大阪湾沿岸地域の特徴がみられる。

直口壷は12の1個体のみであり、口頸部が緩く外反し、無文である。Ⅴ様式以後の直口壷に類似するが、他にその時期の土器はなく、ここで扱っておく。

甕は5の他、14の底部から体部下半が甕になる。14のように体部上半を刷毛、下半を箆ケズリする甕は遺跡から西方の洲本市下内膳遺跡や森遺跡からの出土例があり、森遺跡では住居址からⅣ様式の土器を伴って出土している。14はかなり急激に立ち上がり、丈高で大型の甕の底部と思われ、外面を箆ミガキしていることから、Ⅲ様式に位置づけられる。

鉢は0区ＳＤ－1とＳＲ－2から出土した13と22の2個体がある。くの字に開く口縁をもつ13と、直口の22の2種があり、22の外面は凹線を施す。くの字の口縁の13には脚が付くのかもしれない。ともにⅣ様式に位置づけられるものと思われる。

これらの中期中半から後半の土器については中期前半までにみられた紀伊地方からの影響は少なくなり、細頸広口壷や外面をハケと箆ケズリする甕の存在等、摂津・和泉・河内といった大阪湾沿岸地方からの影響が濃くみられる。また小型広口壷には播磨地方の影響もみられる。

3．古墳時代の土器

土師器直口壷33・小型壷84・甕51・器台49・高杯50、須恵器瓶52・横瓶85・擂鉢8が出土している。いずれも包含層からの出土である。土師器直口壷・小型壷・器台・甕底部・高杯は古墳時代前期の庄内～布留式古段階のものである。

須恵器壷・横瓶・摺り鉢は古墳時代後期のものであるが、壷はほぼＴＫ－43段階、横瓶はＴＫ－217段階であり、時間的には開きがある。

4．律令期の土器

土師器杯Ａ36・87、須恵器杯Ｂ34・35が相当する。土師器杯Ａの36は口縁端部内面をナデで、端部の巻き込みを意識している。36は底部外面箆ケズリ、87は底部は糸切りであり、時期的な差が想定されるが、淡路での糸切り出現時期は定かではない。

須恵器杯Bは口径・器高とも縮小傾向がみられるものであり、淡路の須恵器窯では奥ノ池窯に相当し、奈良時代後半から平安時代初頭に属するものである。

5．中世前期の土器

土器は0区で検出された柱穴P20から出土した土師器柱状高台付小皿の他、0区包含層や6区の包含層出土から土師器椀・杯・高台皿・足高高台皿・小皿・甕、須恵器鉢、瓦器椀、白磁椀が出土している。

柱穴から出土している柱状高台皿は単独であり、まだ年代観の確定していないものであることから、位置付けは難しいが、八峠の編年では柱状高台転換期の12世紀後半から13世紀初めに位置付けされている。

土師器椀57は全体に丸みを持った椀形を残し、外面を箆ミガキしており、岡山県鹿田遺跡から出土した椀を分類した山本のB1類にあたるものである。杯88は内面を水を使用して滑らかに仕上げており、土師器椀と共通する手法を採っている。これら椀・杯は南淡路市釜田遺跡で小皿・足高高台皿とともに多量に出土しており、ほぼ同年代が与えられるものである。先の山本編年では椀は12世紀後半に位置づけられ、椀・杯・皿・足高高台皿はほぼこの年代としておく。

須恵器鉢類は明石市魚住窯産であり、58が鉢B類、95が鉢C類に分類され、ほぼ12世紀の年代が与えられている。

瓦器椀59は和泉産であり、内外面を磨き、高台が方形であることから、Ⅱ－1期に相当するものである。ほぼ尾上編年では12世紀前半に位置づけられるものである。

このように、中世前期とした土器類は最も古く位置づけられるのが瓦器椀の示す12世紀前半であり、もっとも新しいものが柱状高台皿の13世紀初めである。ただし、この器種については編年間が確定しておらず、先の釜田遺跡では11世紀後半～13世紀とされる土師器椀・杯・皿からなる土器群に含まれている。こうした点から、今回出土した中世前期の土器類も11世紀後半から13世紀の間に位置づけておきたい。

6．中世後期の土器

土師器椀・鍋、瓦器椀、瓦質土器羽釜・三足編脚・擂鉢、備前焼擂鉢、輸入磁器の青磁椀、国産陶器の天目椀が出土している。

土師器には椀・鍋があり、椀は53の1個体で、回転台土師器で薄いつくりである。出土した椀と同種の椀は本遺跡西方の洲本市寺中遺跡で、15世紀後半の京都系土師器皿と共伴している。

鍋は、鍔を有さないタイプの91・92、鍔を有するタイプの93の2種があり、前者は神戸市兵庫津遺跡の報告で示された編年では羽釜形タイプ擂磨形A系列に分類され、兵庫津Ⅴ期の15世紀前半の年代が与えられている。後者は同編年では甕形タイプの播丹型に分類され、兵庫津Ⅵ期15世紀後半から16世紀初頃に位置付けされている。

寺中遺跡では土壙4・7から53と同種の椀と鍔を有さない甕形タイプの鍋が共伴して出土しており、それぞれの年代観とは矛盾せず、椀と甕形タイプの鍋は15世紀後半に位置付けられる。鍔を有するタイプは谷間筋遺跡溝23では今回出土した甕形タイプの鍋より1段階先行するものと共伴していることから、91・92の鍔を有する鍋は甕形タイプの93に先行し、15世紀前半に位置付けてよいものと思われる。

瓦器には椀60・96～98があり、いずれも和泉型の瓦器椀である。96は椀形は残すが小形化し、底部は高台と言うより、安定化させるため粘土を貼り付けたもので、粘土紐は全周しない。97・98は口径は保っているが、器高はかなり低くなっている。60は小形化して高台も形骸化している。4個体とも内面のみを粗く磨く。口径の大きい97・98は尾上編年のⅢ－3期に、小形化した60・96はⅣ－1期に位置付けでき、13世紀後半から14世紀前半の年代が与えられている。

瓦質土器には羽釜99・100、三足鍋脚101・102、擂鉢103がある。羽釜は口径に大小があるが、ともに口縁部は肥厚し、外面にはナデによる段が形成され、体部外面は鍔まで鍔ケズリであるなど、器形・調整とも類似する。また、この2点の瓦質羽釜は器形・調整とも「河内・和泉型瓦質焼成土器」の羽釜に極似しており、河内・和泉からの搬入品と思われる。鋤柄の編年を利用すれば2点の羽釜はC類に分類され、Ⅳ－3期に該当するもので、15世紀末から16世紀前半の年代が与えられている。

瓦質擂鉢も、鋤柄によって、羽釜と同様、河内・和泉で生産されたものであることが明らかにされている。そこで、先の編年を利用すれば擂鉢Ⅱ－1期に相当し、羽釜とほぼ同時期の15世紀前半の年代が与えられている。

備前焼の擂鉢は104・105の2点が出土している。104は体部と口縁部が同じ厚さで、口縁端部が外傾する面をもっており、備前焼Ⅲ期に該当し、14世紀後半から15世紀初頭にの年代が与えられる。105は口縁部が拡張されて凹線が施され、端部は面をもつ。備前焼ⅣB期に該当し、15世紀後半から16世紀前半の年代が与えられる。

7．近世の土器

安土・桃山時代以降の遺物を近世の遺物として扱ったが、丹波焼擂鉢と瀬戸・美濃系の天目茶碗がある。他に0区SK－4・5から染付けが出土しているが割愛した。

丹波焼擂鉢106は外面に指押さえ痕を残し、口縁端部は面を持ち、端部内面も面を作って、口縁部は断面三角形を呈することや、摺り目は櫛描きであることから、丹波焼擂鉢ⅡA類に該当し、17世紀後半から18世紀前半の年代が与えられている。

瀬戸・美濃系天目茶碗は口縁部109と底部110が出土している。大窯Ⅲ期の16世紀後半の年代が与えられる。

第2節　遺構

1．調査区の地形

調査区は、地形的には段丘化した扇状地上にあたる0・6区と、段丘下の沖積位置にあたる1～4区に分かれ、段丘化した扇状地上にあたる0・6区において遺構が検出され、1～4区では遺構は検出されなかった。

0・6区の遺構は耕土・床土を除去した下面の土石流性堆積層の上面で検出される。調査区での遺構面下は、標高約3.8m付近までは砂礫層が堆積し、その上部にはにぶい黄褐色や黒色を呈するシルト層が交互に、層厚約2.5mでほぼ水平に堆積する。水平堆積層の最上層は黒色シルト層であり、その上面は緩く北から南に傾斜し、上面の標高は0区で約6.4m、6区で約5.4mとなっている。この上部に土石流性の灰黄色やにぶい黄色を呈する砂層が堆積しており、この堆積物によって調査区周辺の地形は形成されている。

これらの堆積層は、遺跡周辺はまず砂礫が堆積するような環境から、シルト等が水平に堆積する水没したような環境に変化し、その後、陸化して、今度は土石流を受けるような環境に変化したことを示している。遺構面が土石流性堆積層の上部にあることは、この地が土石流等の影響を受けない、ある程度落ち着いた環境になってから、人々が生活の場として利用を始めたことを示す。これ以後、0・6区周辺は比較的安定した土地条件となったようであり、遺構面上には洪水による堆積物はほとんどみられなくなる。

1～4区・6区北西隅の沖積低地は黒色シルト以下の層を抉りこんで形成され、沖積層からはⅣ－1期の瓦器椀が出土していることから、鎌倉時代の終わりの14世紀前半までは流路が入り乱れ、砂礫を中心とする層が細かく堆積する状態であったことが窺われる。

室町時代以降になると河川の影響は少なくなったようで、砂礫の堆積はみられなくなり、沖積低地は水田化されていく。しかし、水田化されて以降も、水田土壌と洪水砂が交互に堆積する状況であり、度重なる洪水を受け、洪水の度に水田を作り直すといった作業が行われ、調査前の地形に至っている。

2．各期の遺構

0・6区の遺構面上で検出された遺構は、断続するものの、弥生時代中期前半、弥生時代中期中半～後半、中世前期、中世後期の各期に及ぶものである。遺物は各期のものが出土し、これ以外にも古墳時代や律令期のものが出土しており、両時期にも調査区近辺が生活の場として利用されていたようである。

しかし、検出される遺構は各時期で様相が異なっており、ここでは調査区全体で検出された遺構を時期的に区分し、遺跡の変遷を検討する。

なお、平成15年度の調査で確認された弥生前期とされる水田遺構は検出できなかった。平成15年度の調査では灰色シルト及び黒灰色シルト層上で水田遺構が検出されている。この灰色シルト・黒灰色シルトは湿地性の堆積物とされ、今回の調査では遺構面より下層で認められた水平堆積の黒色シルトとした層に対応するものと判断している。そのため、0・6区はこの層まで掘り下げ、黒色シルト層上に砂層が堆積する状況は確認したが、水田遺構は検出できなかった。これは黒色シルト上面が標高5.4～6.4mと平成15年度の調査区より約0.3～1.3m高くなっていること、また平成15年度の調査の水田遺構は東傾

斜する側で検出され、西傾斜の部分では遺存状況は悪っており、今回の調査区はさらにその西側にあたっていること等に起因するものと思われる。

弥生時代前期末～中期初頭の遺構

この時期の遺構には、0区のSD－1・SR－1・2、6区のSD－3・4・5・6・7が該当する。居住を示すような遺構は検出されず、溝あるいは流路のみが検出されている。これらの溝・流路は遺跡の中での位置、他の遺構との関連をみなければ、自然に形成された流路なのか人工物なのかは判断が難しいが、0区SD－1・SR－1・SR－2と6区SD－3が比較的直線的であり、人工的な溝である可能性を持つ。また、6区SD－3は平成15年度の水田遺構と同方向性をもっている。これら以外の6区SD－4～7については蛇行するなどしており、自然の流路である可能性が高いと判断している。これらの遺構からみて、扇状地上の末端はこの時期はまだ水の影響を受けやすい環境下にあったものと思われる。

弥生時代中期の遺構

0区SK－3と6区のSX－1・2が該当する遺構である。6区のSX－1・2は平成15年度に検出された周溝墓群と一連となるものであり、周溝墓群の西端にあたる。SX－1は調査区から南に伸び、SX－2は北に伸びていることから、周溝墓群はさらに南北に広がっているもの思われる。

SX－1は、調査区の都合上、全容を把握できなかったが、直径は内径で約12mに復元される円形周溝墓である。遺物等が出土していないため、時期を決定することはできないが、時期決定の参考となるのは、平成15年度の調査で検出された円形周溝墓であり、この周溝墓では弥生時代中期後半の台付壺が出土している。同一遺跡で検出される円形周溝墓が必ずしも同一時期とは限らないが、時期決定の目安にはなるものと考えている。

SX－2は土壙に溝が連続するような状況で検出されたものであり、内部から穿孔された弥生土器壺が出土したことから、周溝墓の一部を形成する溝と判断しているものである。溝は比較的直線で、土壙上に深くなった部分が西にカーブすることから、周溝墓は方形であり、検出された溝は周溝墓の南東隅を区画する溝と考えられる。出土した弥生土器壺は細頸広口壺で、体部最大径は中位にあり、頸部下半から体部上半を櫛描文で加飾している。こうした点からⅡ様式新～Ⅲ様式古段階に相当するものと判断しているが、平成15年度出土の土器も合わせて検討する必要があり、詳細な検討はそちらに譲りたい。

今回検出された方形周溝墓SX－2は平成15年度調査区から連続し、方形周溝墓群の西端に位置するものである。円形周溝墓SX－1は方形周溝墓群からは離れて外側に位置し、現状では単独で位置している感がある。平成15年度の調査でも、円形周溝墓は方形周溝墓の一部を切るものがあるものの、方形周溝墓群の縁から外側で検出されている。こうしたことから、本遺跡での円形周溝墓は周溝墓群最終期に、周溝墓群の最も外側に築かれた可能性がある。

中世前期の遺構

柱穴と土壙が検出されている。柱穴は0区・6区の両方で約175個が検出されているが、個別に時期区分を行うことは困難である。ただ、各柱穴から出土した土器を細片も含めて検討すると、0区の柱穴内から中世後期の土器はみられず、0区の柱穴は中世前期以前に属するものとみられる。6区の柱穴は中世前期のものと中世後期のものが混在している。0区・6区ともに掘立柱建物跡には復元できていない。このため、土壙等の性格も不明である。

中世後期の遺構

柱穴・土壙・溝が検出されている。0区はこの時期から居住域として利用されなくなったためか、柱

穴は検出できなくなり、段丘崖と並行する溝２本が３ｍの間隔で並行して検出されている。水田に関係する溝と思われる。

６区はまだ居住域に利用されていたようで、柱穴・土壙と溝が検出されている。柱穴は柱抜取り跡に礫を詰め込んだりする特徴のあるものも存在したが、掘立柱建物としては復元できていない。土壙はＳＫ－２が該当するが、その性格は不明である。ＳＤ－２もこの時期に該当する溝である。水田化の際の削平によって段をなす遺構面の下部側から始まっており、水田に伴う溝である可能性が高い。

この他、６区北西隅では沖積低地側設けられた水田に伴う溝が段丘崖と並行して設けられており、沖積低地はかなり現状に近いところまで埋没していたようである。

３．まとめ

今回の下加茂遺跡は洲本川水系の激甚災害から復興計画を受け実施したもので、調査は掘削予定範囲に限って実施した。遺跡は扇状地が段丘化した末端にあたり、今回の調査区は段丘の末端と段丘下の沖積地あたる。すでに述べたように、検出した遺構は大きく弥生時代前期末～中期初頭、弥生時代中期中半～後半、中世前期、中世後期のもので、弥生前期末～中期初頭段階では溝あるいは自然流路であり、人々が生活したことを如実に物語るような遺構は検出されなかった。東接する平成15年度の調査区では水田が検出されているが、今回の調査区までは広がっていない。一方土器類は量的には多くはないが、弥生上器と突帯文系の土器が出土しているが、弥生土器は前期様相３～中期前半の様相１・２に位置づけられるものであり、この段階まで突帯文系の土器が遺存する可能性を示した。また紀伊地方との交流を窺わせるものなども出土しているが、紀伊形甕は線ヶ淵遺跡では出土甕類の相当量を占めており、淡路における紀伊形甕がすべて紀伊からの搬入か検討の余地があろう。

弥生時代中期中半～後半の遺構には方形周溝墓と円形周溝墓が検出されており、平成15年度調査区と一体となった墓域が形成されており、中期前半の方形周溝墓から中期後半には円形周溝墓へという変化が認められる。ただ、この段階の遺物は極めて少ない。方形周溝墓から出土した壺62は他の土器に比べ器表の風化が激しく、体部に穿孔があることから、供献土器として一定期間露出していた可能性もある。

中世前期・後期は、段丘上では柱穴が検出されており、復元はできなかったが建物が存在していたものと見られる。段丘下の沖積地は中世前期にはまだ氾濫を繰り返すような状態で安定はしない状態であったが、中世を通じて徐々に安定化し、中世後期になって水田化されていくが、それでもまだ洪水をたびたび受け、その都度、水田面は上がり、水路は繰り返し改修されていったことが確認された。こうした現象は調査区周辺に限定したことではなく、洲本川流域における沖積低地の水田には共通したものと思われる。

また、今回の調査の契機となった平成16年の大雨による洪水は、比較的安定した土地条件をもつ段丘末端の０区や６区にまで及んでいる。淡路島特有の河川が山間地から急傾斜で平野部に流れ出ることや、中世前期には沖積低地の谷部であったものが、中世期を通じた洲本川水系の堆積物によって埋没し、段丘末端と変わらぬ高さとなってしまったことなどが原因であろうが、現在においても田畑や家屋に洪水の危険が残っていることを如実に示した。今回の復興計画は洲本川水系のほぼ全域に渡るものであり、一刻も早い完成と、完成後は長年にわたる洪水からの危険から開放され、安定した土地条件が完成されることを望みつつ筆を置くことにする。

まとめ引用・参考文献

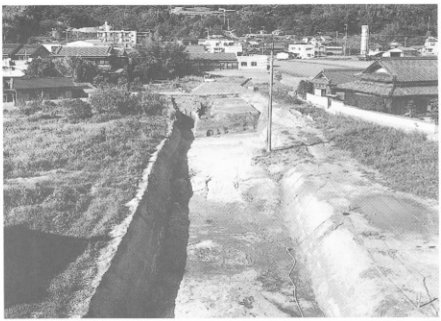
伊藤晃子『弥生土器Ⅰ―近畿―』ニューサイエンス社1973
家根祥多『晩期の土器―近畿地方の土器―』『縄文文化の研究』雄山閣出版1981
土井孝之「紀伊地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』木耳社1989
寺沢薫・森井貞雄「河内地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』木耳社1989
樋口吉文「和泉地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅱ』木耳社1990
森田克行「摂津地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅱ』木耳社1990
正岡睦夫「備前地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社1992
菅原康夫・藏山雄一「阿波地域」『弥生土器の様式と編年　四国編』木耳社2000
篠宮　正「東播磨地域における弥生土器編年」『弥生土器集成と編年　播磨編』2007
尾上　実「大阪南部の中世土器」『中近世土器の基礎研究』1985
森田　稔「東播系中世須恵器の生産と流通」『中近世土器の基礎研究Ⅲ』1987
鍋柄俊夫「大阪府南部の瓦質土器生産（2）」『中近世土器の基礎的研究Ⅴ』1989
八峠　興「柱状高台考」『中世土器研究論集』2001
武田恭彰「岡山県に於ける回転台上師器の成立と変遷」『中近世土器の基礎研究Ⅹ』1994
山本悦世「吉備南部地域における古代末～中世の土師器の展開」『中近世土器の基礎的研究Ⅷ』1992
兵庫県教育委員会『魚住古窯跡群』1983
兵庫県教育委員会『兵庫津Ⅱ』2004
兵庫県教育委員会『寺中遺跡』1989
兵庫県教育委員会『谷町筋遺跡』1990
兵庫県教育委員会『森遺跡』1988
兵庫県教育委員会『鈩田遺跡』1990
兵庫県教育委員会『大森谷遺跡』1985
兵庫県教育委員会『洗路・志知川沖田南遺跡』1987
兵庫県教育委員会『波毛遺跡・川添遺跡』2000
兵庫県教育委員会『美乃利遺跡』1997
兵庫県教育委員会『東武庫遺跡』1995
兵庫県教育委員会『下内膳遺跡』1996
兵庫県教育委員会『福田片岡遺跡』1991
兵庫県教育委員会『玉津田中遺跡』1994
洲本市教育委員会『武山遺跡発掘調査報告』1975
洲本市教育委員会『安乎間所遺跡発掘調査概報』1985
南あわじ市教育委員会『塚ヶ廻遺跡―4次調査』『南あわじ市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』2008
神戸市教育委員会『大開遺跡発掘調査報告書』1993
伊丹市教育委員会・六甲山麓遺跡調査会『口酒井遺跡』2000
大阪市文化財協会『長原遺跡発掘調査報告Ⅲ』1983
東大阪市教育委員会・東大阪市文化財協会『水走・鬼虎川遺跡発掘調査報告』1996
東大阪市教育委員会・東大阪市文化財協会『水走遺跡第3次・鬼虎川遺跡第21次発掘調査報告』1998
和歌山県文化財センター『川辺遺跡発掘調査報告書』1995
御坊市教育委員会『堅田遺跡』2002
御坊市遺跡調査会『中村地区遺跡発掘調査報告書』1995
滋賀県教育委員会『湖西線関係遺跡調査報告書』1973

写真図版

調査区全景（航空写真）

0 区全景（南から）

0 区ＳＤ－１・ＳＲ－１・ＳＲ－２（南から）



0・1区全景
（南から）

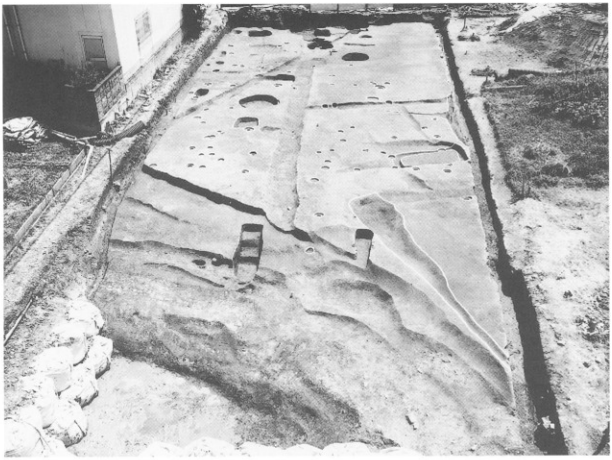
0・1区境部土層断面
（南東から）

1・2区全景
（南から）

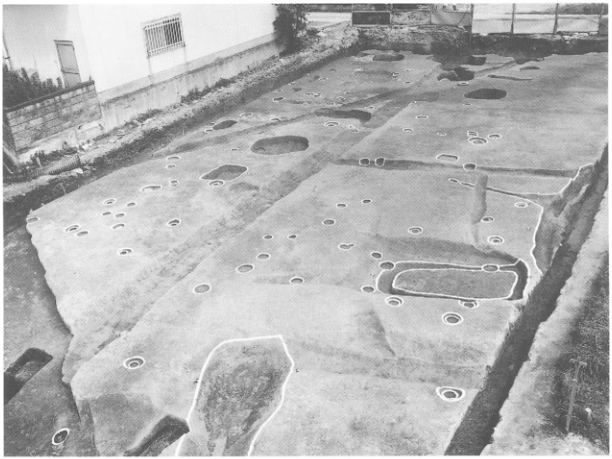
3 区全景
（東から）

3 区南壁土層断面
（北西から）

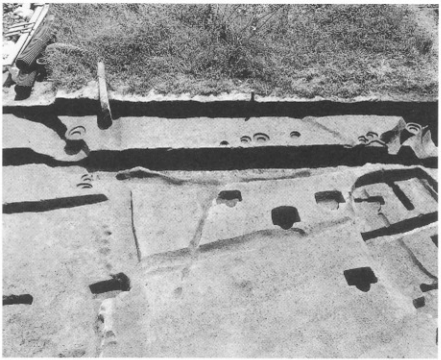
4 区全景
（南から）



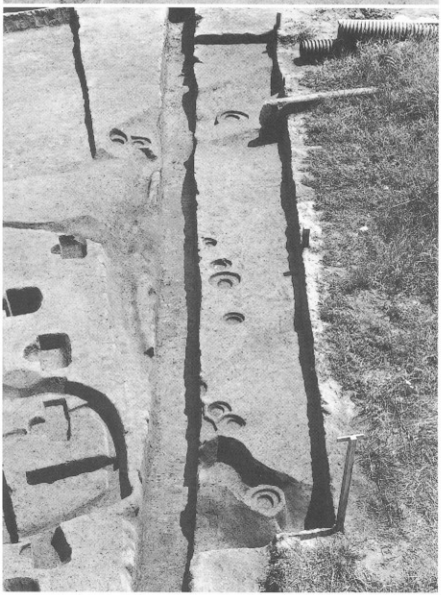
6 区全景（西から）



6 区中世遺構群（南西から）



6区ＳＸ－１
（北から）



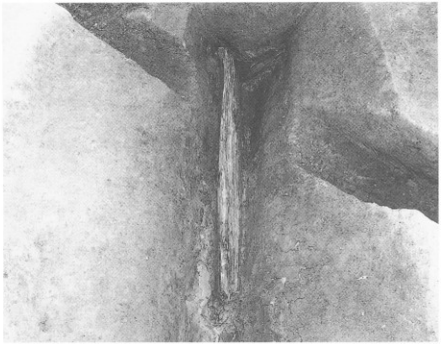
6区ＳＸ－１
（西から）

6区ＳＸ－２　土器出土状況
（南から）

6区弥生時代中期以前の遺構
（西から）

6区ＳＤ－３
（南から）

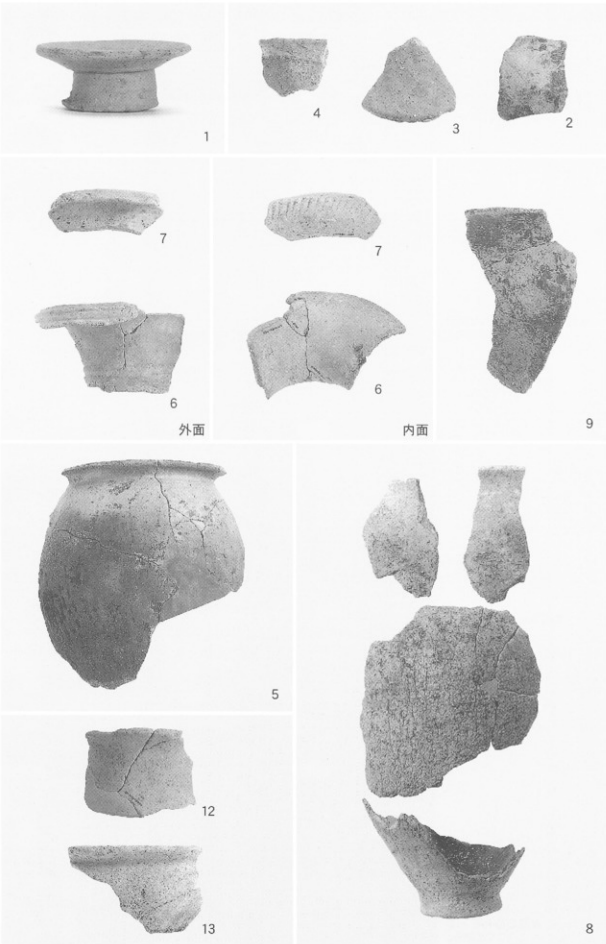
6区ＳＤ－３断面
（北から）



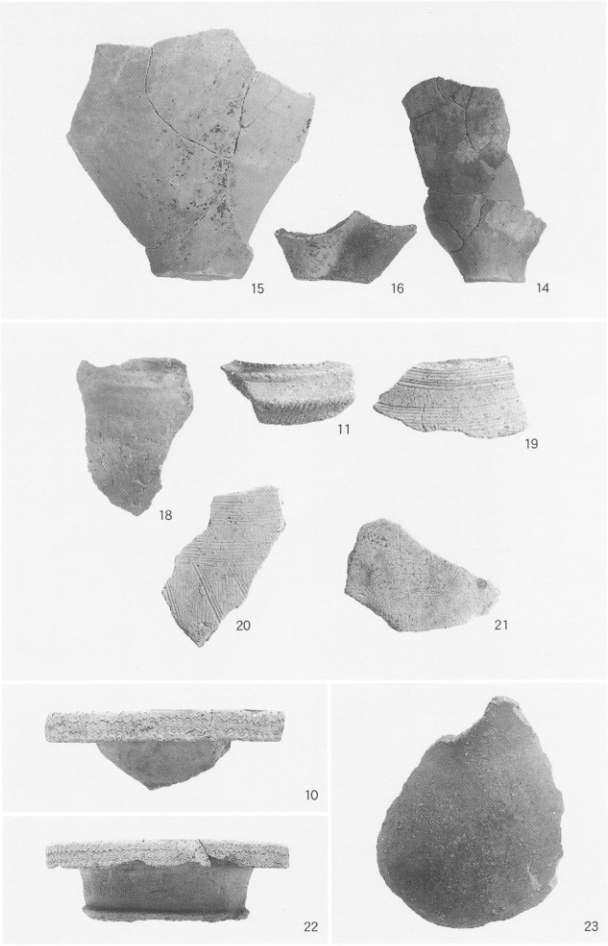
6区ＳＤ－３木材出土状況
（北から）

6区ＳＤ－６・７断面
（北西から）

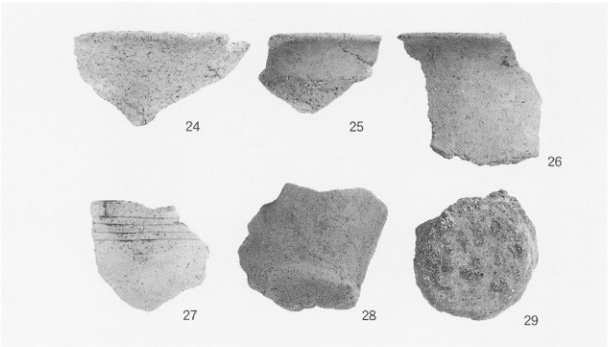
6区ＳＤ－６・７
（北から）

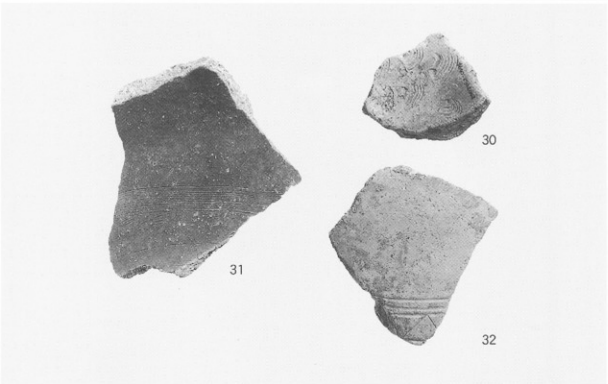


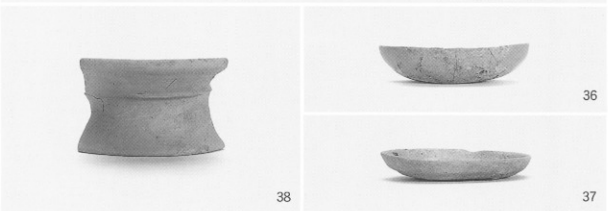
0区　出土土器1



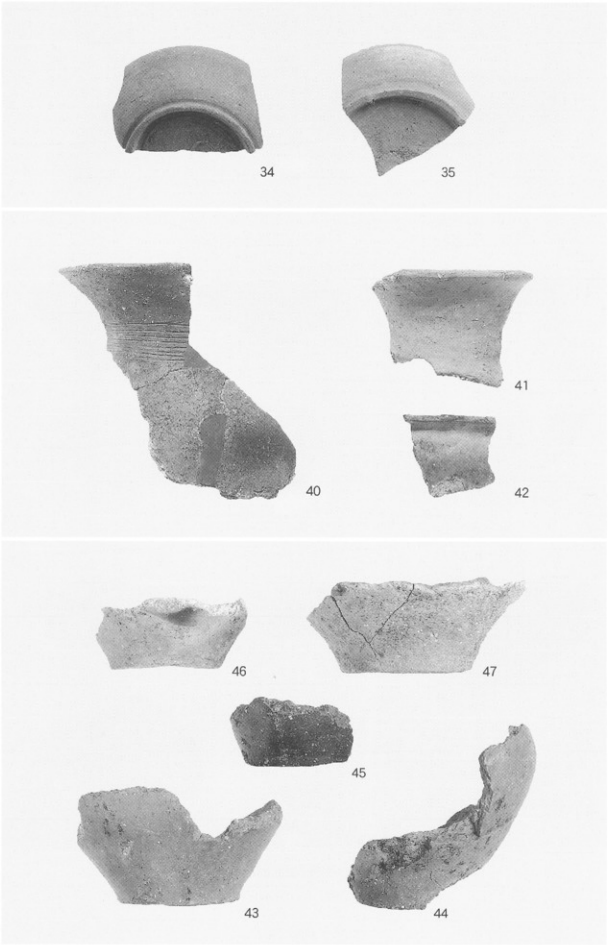
0区　出土土器2



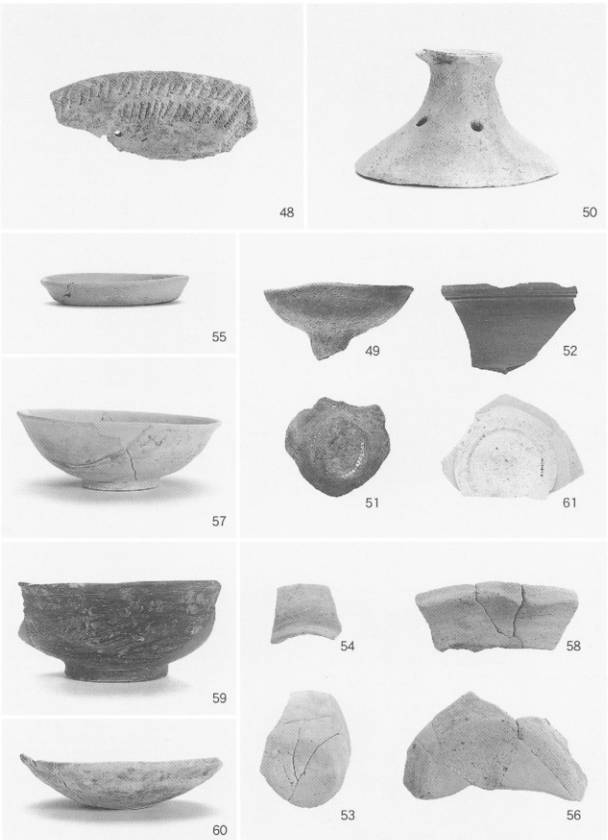




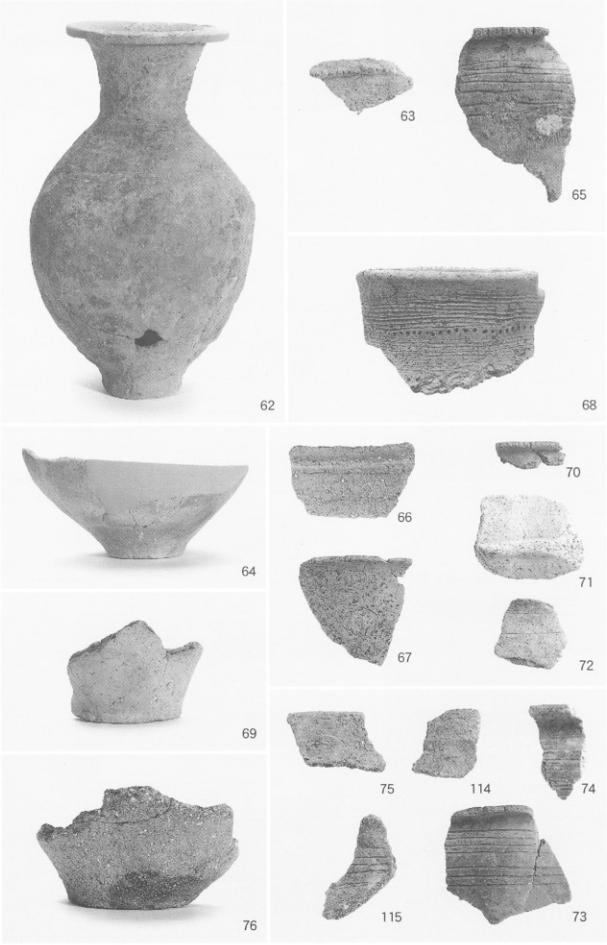
0区　出土土器3



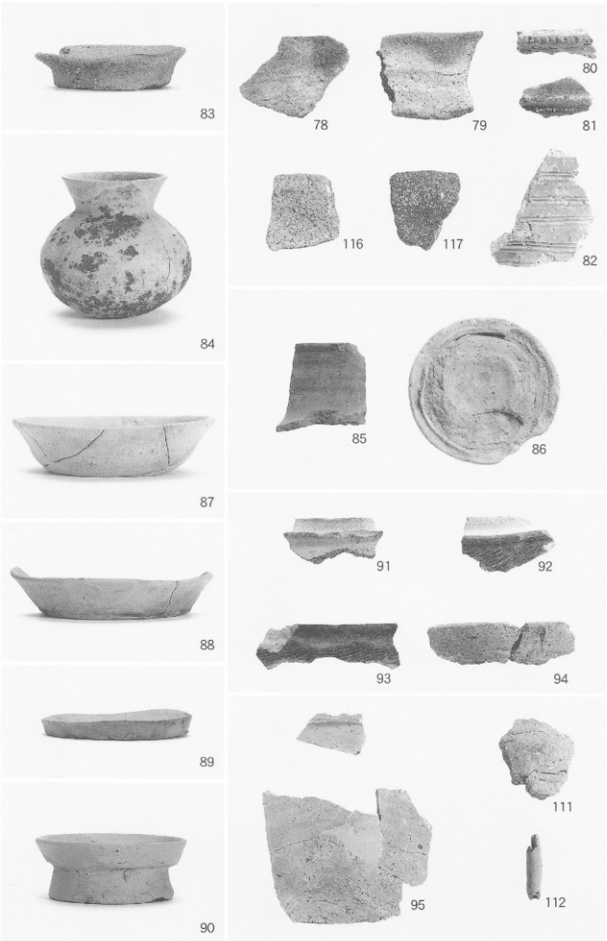
0区　出土土器4



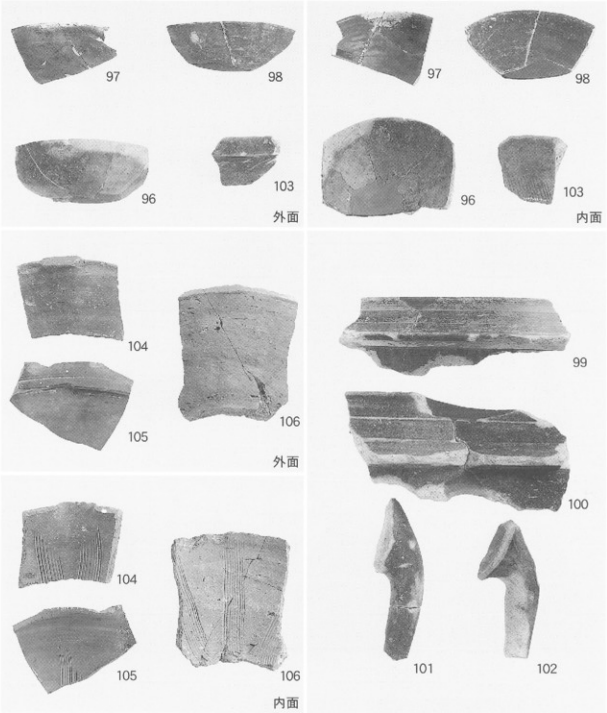
1・2区　出土土器



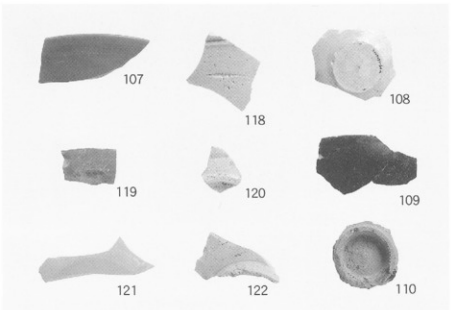
6区　出土土器1

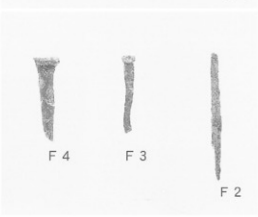


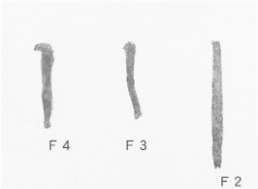
6区　出土土器2


97
98
96
103
外面
97
98
96
103
内面
104
105
106
外面
104
105
106
内面
99
100
101
102

6区　出土土器3







磁器・陶器・石製品・銅製品・鉄製品

報告書抄録

ふりがな	しもがもいせき
書名	下加茂遺跡Ⅱ
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第351冊
編著者名	吉識雅仁　山上雅弘　小川弦太
編集機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中500番地　TEL　079-437-5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号　TEL　078-341-7711
発行年月日	2009年（平成21年）３月23日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
下加茂遺跡	兵庫県洲本市下加茂	28205	2007082	34°34′79″	134°87′25″	平成19年6月25日～平成19年10月22日	1,445㎡	洲本川河川激甚災害対策特別緊急事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	調査期間	特記事項
下加茂遺跡	墳墓他	弥生時代	方形周溝墓・円形周溝墓・土壙・溝・柱穴	弥生土器・石製品他	弥生時代中期の方形周溝・弥生時代中期後半の円形周溝墓、弥生時代中期初頭の土器が出土

兵庫県文化財調査報告 第351冊

洲本市所在

下加茂遺跡 Ⅱ

洲本川河川激甚災害対策特別緊急事業（翼川工区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成21年3月23日発行

編　集　兵庫県立考古博物館
〒675-0142　加古郡播磨町大中500
TEL 079-437-5589

発　行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通5丁目10－1

印　刷　株式会社ソーエイ
〒673-0898　明石市樽屋町6－6